

シンポジウム



不登校当事者の実態とニーズを把握し、

官民共創でつくる効果的な施策とは

2

先進自治体実践編

2024年

12/12 木 13:30~16:30

オンライン開催
参加費無料

令和6年度 独立行政法人福祉医療機構 社会福祉振興助成事業
主催：NPO法人多様な学びプロジェクト 後援：文部科学省、こども家庭庁

当日発表資料



すべてのこどもが自分らしく育つ社会の実現に向けて

～2024年度調査から見えること～

報告者：生駒 知里（いこま ちさと）

NPO法人多様な学びプロジェクト 代表理事

本発表資料の構成

1、「不登校のこどもの育ちと学びを支える当事者実態ニーズ全国調査」定性調査速報

昨年度行った、不登校のこども、保護者、不登校経験者の3者合計2,812人から回答を得た「[不登校のこどもの育ちと学びを支える当事者実態ニーズ全国調査](#)」の約20個項目の自由記述（定性調査）を分析した追加調査の一部速報を紹介。本報告は今年度末を予定

2、「居場所の価値の見える化」調査報告

4つの民間の居場所を利用する子ども、保護者、スタッフからのヒアリングを元にM-GTAで分析した調査

3、「官民連携先進自治体グッドプラクティス」ヒアリング調査報告

5地域10自治体の20の調査対象先にヒアリングし、好事例や共通する要素を類型化し紹介

4、不登校前後の課題構造化

不登校に関わる多様なステークホルダーのワークショップから問題の背景を構造化

本日、皆さんにもっていただきたい
問い

3つの調査と1つの構造化
WSから
共通して導き出されたもの
は何か



多様な学びプロジェクト



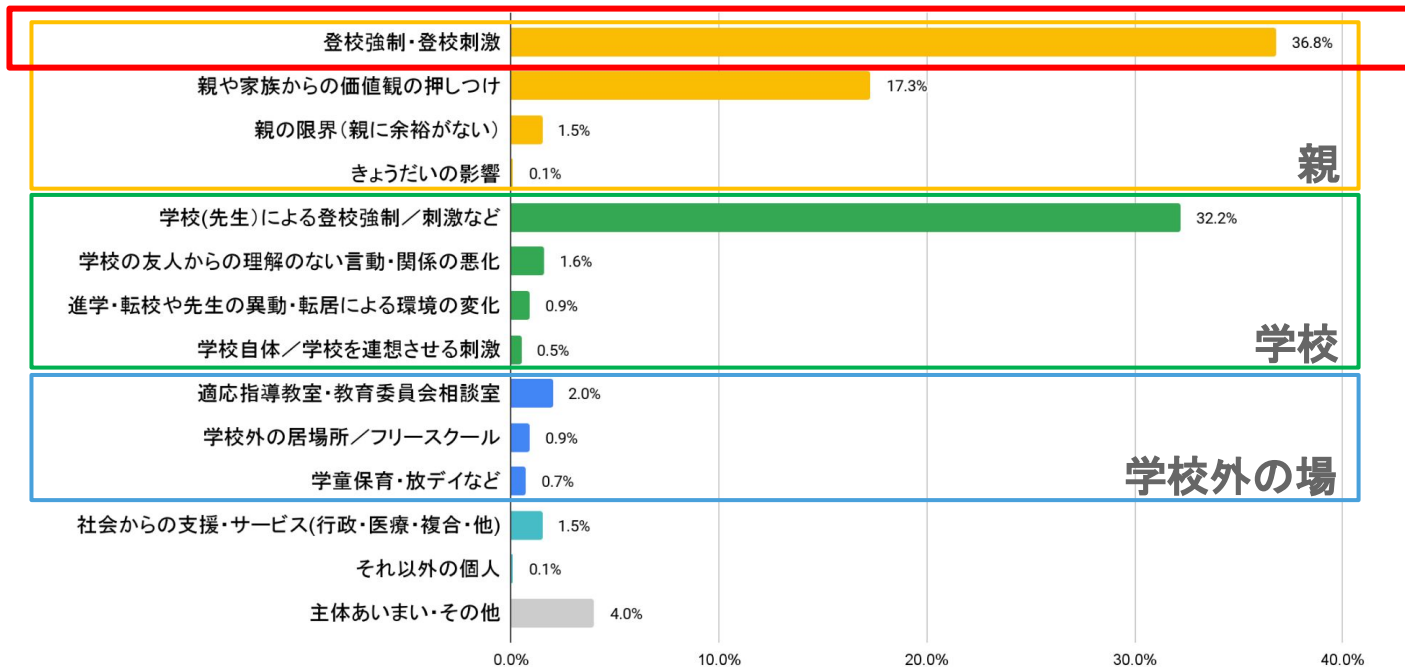
「不登校のこどもの育ちと学びを支える当事者実態ニーズ全国調査」
定性調査速報

追加分析

不登校をしている子どもが悪い変化をした支援・対応

お子さんの状態が悪い変化をした場合、きっかけとなった支援や対応があれば教えてください。

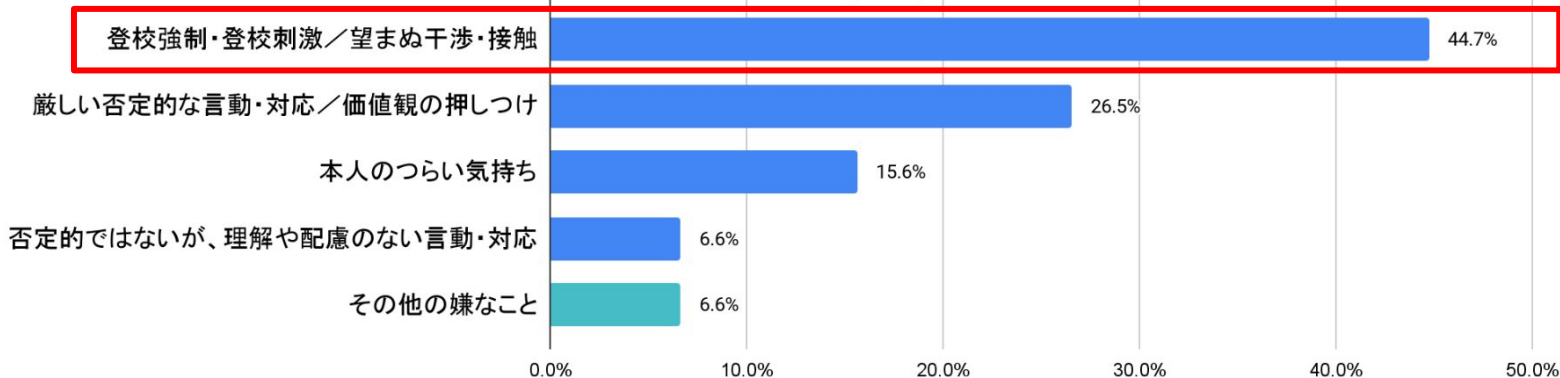
(有効回答数1165)



親自身による「登校強制/刺激」が最も多く(36.8%)、次に学校(先生)による「登校強制/刺激など」(32.2%)が多かった

(有効回答数347)

学校に行きづらかったり行っていないときに、あなたが嫌(いや)だったことがあれば教えてください。



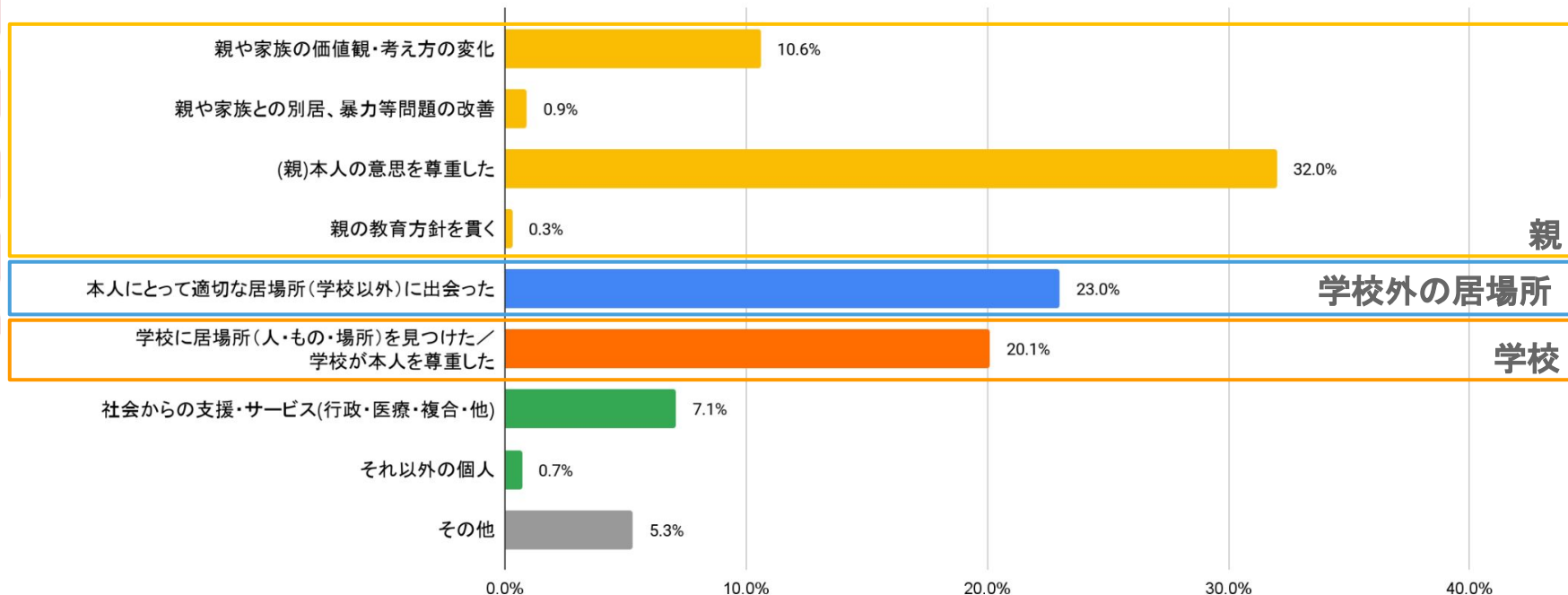
1番多かったのは「登校強制・刺激・干渉など」で記述の半分近い44.7%だった。その中で誰によるものか書かれているものでは親・家族が一番多く全体の12.4%、次に9.5%で学校の教師と友人などが並んだ。2番目に多かったのは26.5%の「厳しい否定的な言動・対応など」で、教師によるものがその中では多かった(全体の6.9%)。3番目には誰かに何かされたということではなく、自分自身の辛い経験を書いたものが15.6%となった。

不登校をしている子どもが悪い変化をした／嫌だった【記述から】

- 「無理に教室に入れてみようとしたとき、今まで見たことのない恐怖の表情になり、これは間違った対応だ、なんて酷いことをしてしまったのだと、母親である私もとても落ち込みました」（40代・母親）
- 「先生や保健室の先生に少しでも登校してと言われ、登校すれば頑張ったね！と褒められていた事。登校した帰りは元氣なく真っ青な顔をしていたのに」（50代・母親）
- 「市や民間の適応指導教室。小2が起立着席礼に合わせる環境。元校長先生や教員がたくさんいても本人は付き合いたくない。復学という目標は無しにしたんですと言っても、声かけや対応の端々に感じる」（40代・母親）
- 「学校へ行くタイミングの約束をさせられる」（不登校経験者・20代・男性）
- 「親に『世間に恥ずかしい』と言われたことが未だ突き刺さっている」（不登校経験者・30代・女性）
- 「同級生がホームルームで書かされたであろう『お手紙』」（不登校経験者・30代・女性）
- 「先生に、帰りたい時は言ってねと教室に連れていかれて、途中もう帰りたいって言ったのに、だましだまし帰らせてくれなかったこと」（8歳、女の子）
- 「毎日今日は学校行く？と両親に聞かれたこと。両親が口を開けばなんで学校に行かないのかと理由を聞かれたこと」（14歳、女の子）
- 「先生が『家において楽だよ』と言うこと」（14歳、男の子）
- 「親は無理せず休んでいいと言ってくれてホッとしたけど、学校行かないと成績もらえないし、成績ないと高校行けないし、がんばって行ってみても、もう授業わからないし、気持ちがぐちゃぐちゃになって、どうしたらいいかわからなくて、嫌だった」（15歳、男の子）
- 「周りの人にどう思われるだろう？ってグルグル悩んでました。あとは四六時中ずっと、なんで自分が学校に行けないか？自問して、自分で自分を責めていました」（13歳、どちらともいえない）

お子さんの状態が良い変化をした場合、きっかけとなった支援や対応があれば教えてください。

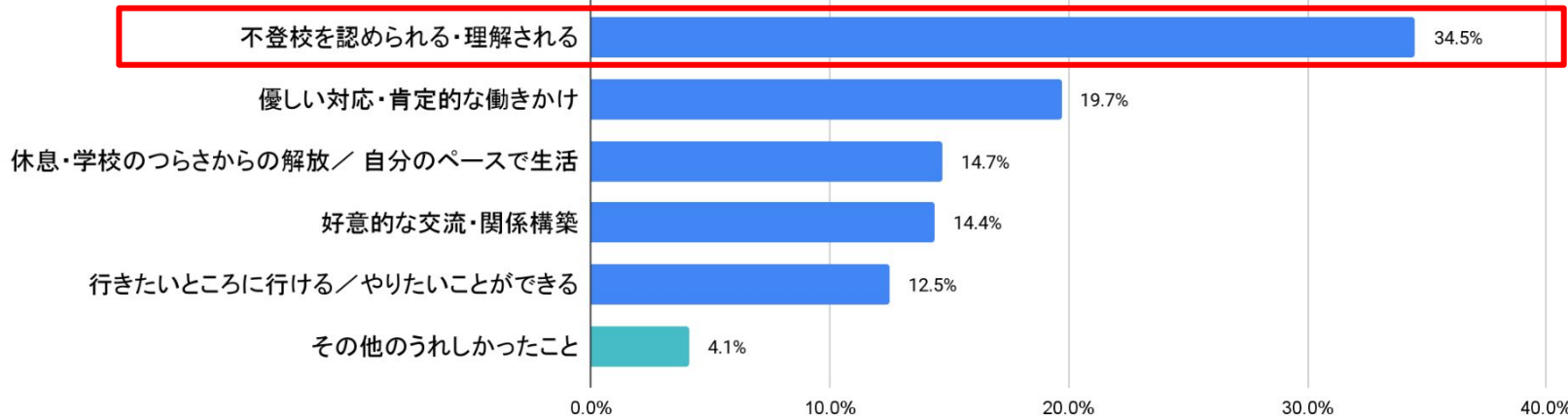
(有効回答数1516)



4割強が親・家族からの働きかけで、「本人の意思を尊重した」が最も多い(32.0%)。次に、「適切な学校外の居場所に出会った(23.0%)」、3番目に「学校に居場所(人・もの・場所)を見つけた／学校が本人を尊重した(20.1%)」だった。

不登校をしている子どもにとって嬉しかったこと

学校に行きづらかったり行っていないときに、あなたがうれしかったことがあれば教えてください。（有効回答数319）



最も多かったのは34.5%の「不登校を認められる・理解される」だった。その中でも最も数が多かったのは親・家族から理解される経験で全体の15.4%を占めた。誰がということは不明ではあるが不登校が認められ・理解されることでほっとしたというような記述も11.9%と多かった。次に多かったのは教師や学校の友人などからの「優しい対応・肯定的な働きかけ」(19.7%)だ。3番目に多かったのは不登校することで「休息・学校のつらさからの解放／自分のペースで生活」の14.7%だった。

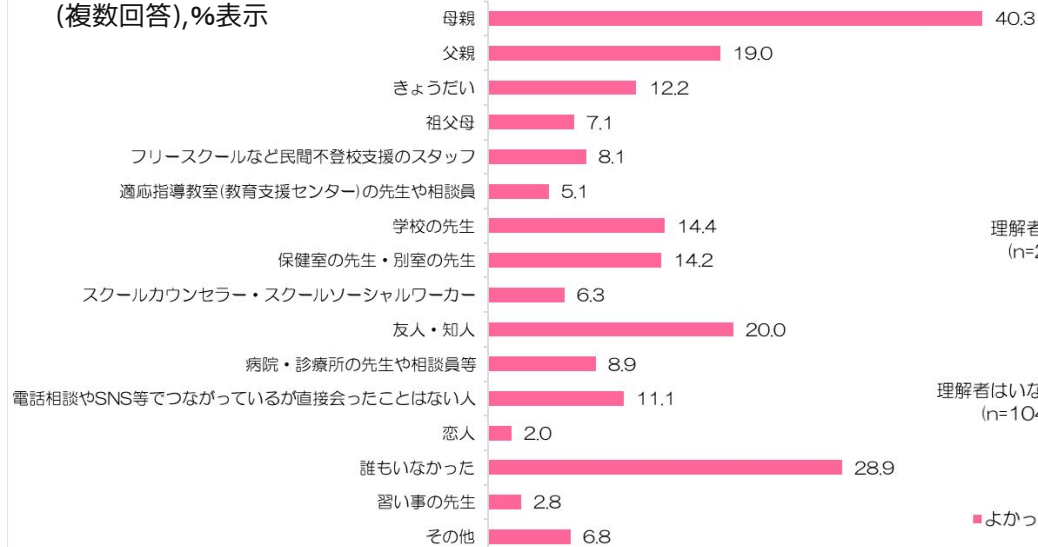
不登校をしている子どもがよい変化をした／嬉しかった【記述から】

- 「学校に行かなくても良いということ、親が腹の底から思えるようになり、あるがままを認めることができた時」(保護者調査・40代・母親)
- 「フリースクールに入ったとき、学校に行っていない子どもが自分だけじゃないと知り、心底安心したようです。」(保護者調査・40代・母親)
- 「放っておいてもらえた、あれこれ聞き出そうとせずいつも通りに接してもらえた」(不登校経験者・30代・女性)
- 「お母さんが私を信頼して自由に過ごすことを許してくれたこと。そのままの私でいることを受け入れてくれて、抱きしめてほしい時に抱きしめてくれた」(不登校経験者・20代・女性)
- 「お母さんが、もう学校行くのやめようと言ってきて、家でゆっくり過ごせるようになったこと」(8歳、男の子)
- 「病院を変えたら、先生が「学校なんか行かなくていいんだよ!」と言ってきてくれた」(11歳、男の子)
- 「学校が合わないだけ!行かなくていいよ!等の事を言われた時」(9歳、女の子)
- 「ぐちゃぐちゃな気持ちを何度も聞いてくれた」(15歳、男の子)
- 「不登校になって動けなくなったときに、外に出られなくなったときに、旅行に連れて行ってきてくれた」(11歳、男の子)
- 「フリースクールで友達ができて人と話せたのが嬉しかった」(18歳、女の子)
- 「好きなことを時間を気にせずできることがうれしい」(8歳、女の子)
- 「学校の不要さに気がついた。私が学校に行かないことで救われる人がいると思えた。同じような人の意見を聞いて、とても社会に関して興味を取り戻せた」(12歳、女の子)

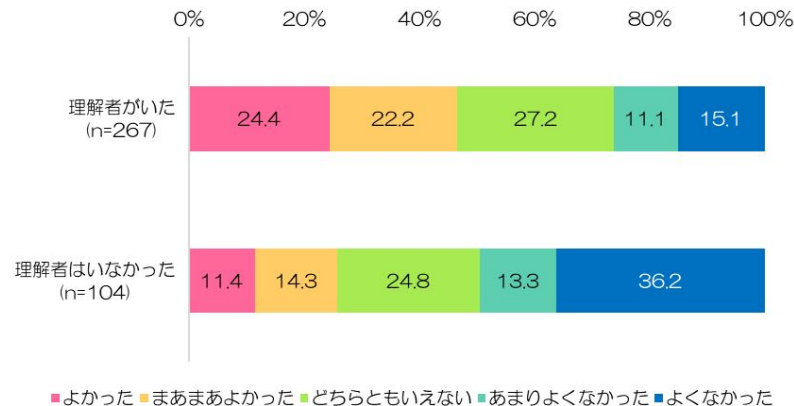
昨年度発表資料より

あなたが不登校や学校に行きづらかった時、
あなたのことをよく理解してくれている人はいましたか。(n=395)

(複数回答),%表示



あなたは現在、
ご自身の不登校経験についてどう感じていますか。

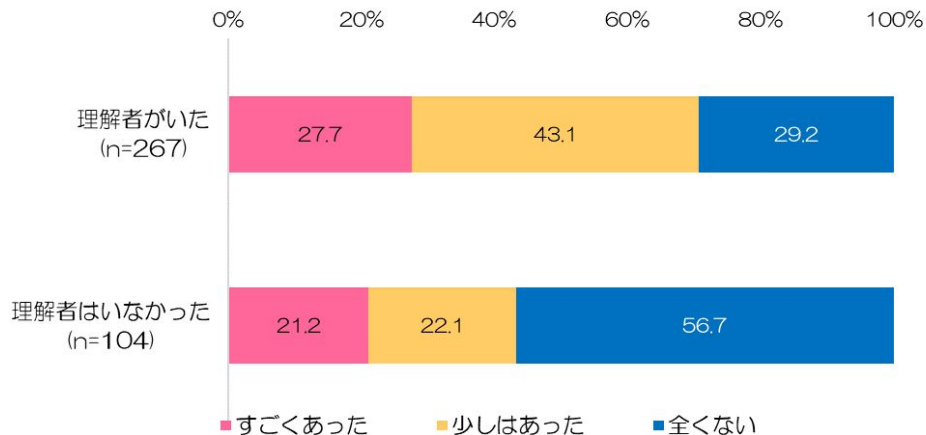


理解してくれる人では母親が最も多く、保護者支援が重要であることがうかがえる。また「誰もいなかった」も3割弱である。不登校や学校に行きづらかった時代に「理解者がいた」と回答した人は「理解者がいなかった」と回答した人よりも、不登校経験について「よかった」「まあまあよかった」と回答した割合が高い傾向がみられた。

不登校経験について

昨年度発表資料より

あなたが不登校や学校に行きづらかった時、あなたのことをよく理解してくれている人

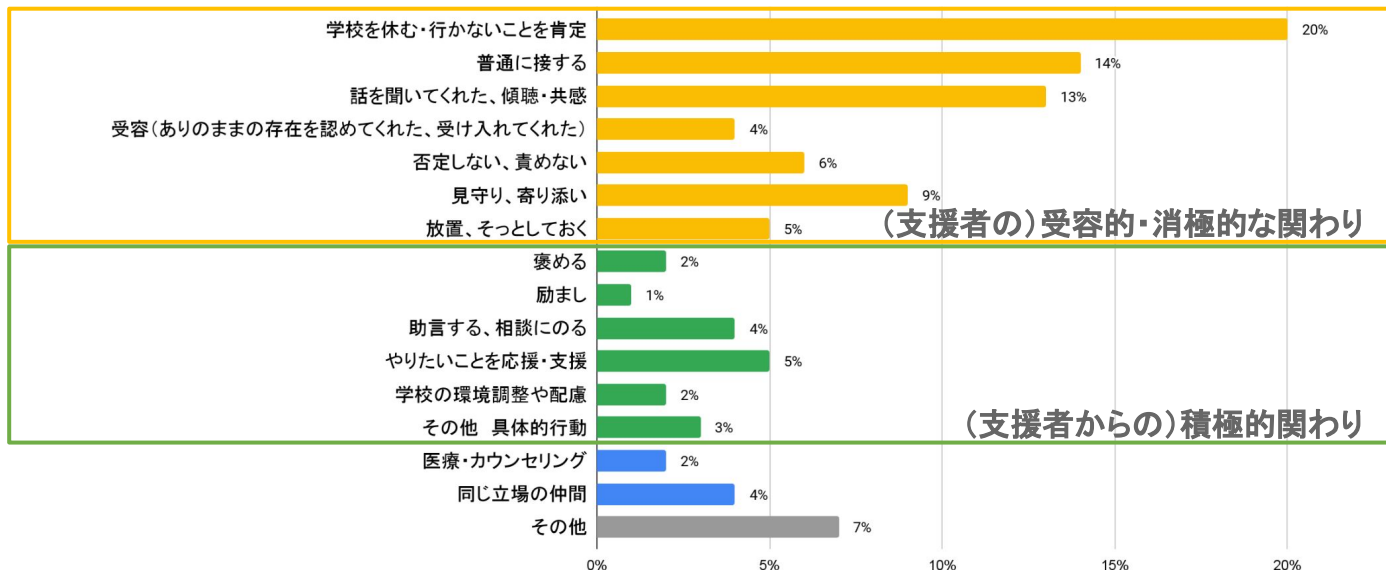
あなたの不登校経験は社会に出た時に
有利になった、あるいは活かせていると感じたこと

不登校や学校に行きづらかった時代に「理解者がいた」と回答した人は「理解者がいなかった」と回答した人よりも、「不登校経験が有利になった、あるいは活かせている」と感じている割合が高い傾向がみられた。

理解してくれていると感じた具体的なエピソード

(理解してくれている人がいたと回答した方)
理解してくれていると感じた具体的なエピソードがあれば教えてください

(有効回答数216)



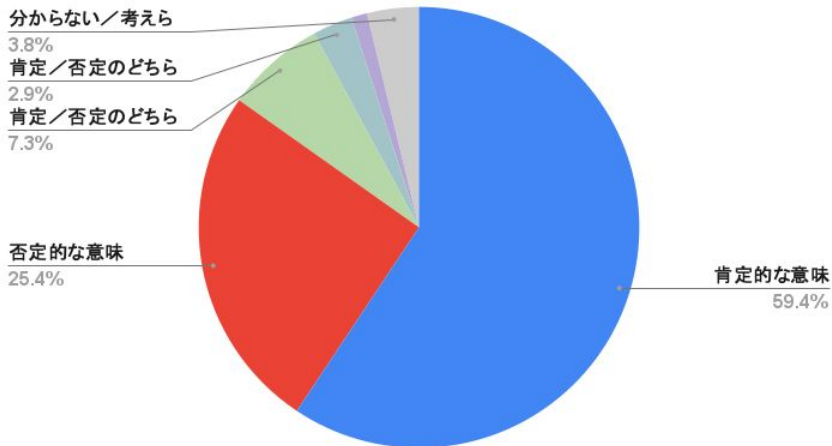
学校を休む・行かないことを肯定された時に理解してもらったと感じたという回答が最も多い。ついで不登校を詮索せず、“普通に接する”も多い。受容、否定しない、寄り添い、そっとするような受容的・消極的関与は、ほめる、励ます、助言する・相談に乗るといった積極的関与より多い傾向がみえた。「その他・具体的行動」には、その時当事者が必要とした具体的行動を取ってくれたというものが分類された

理解してくれていると感じた具体的なエピソード

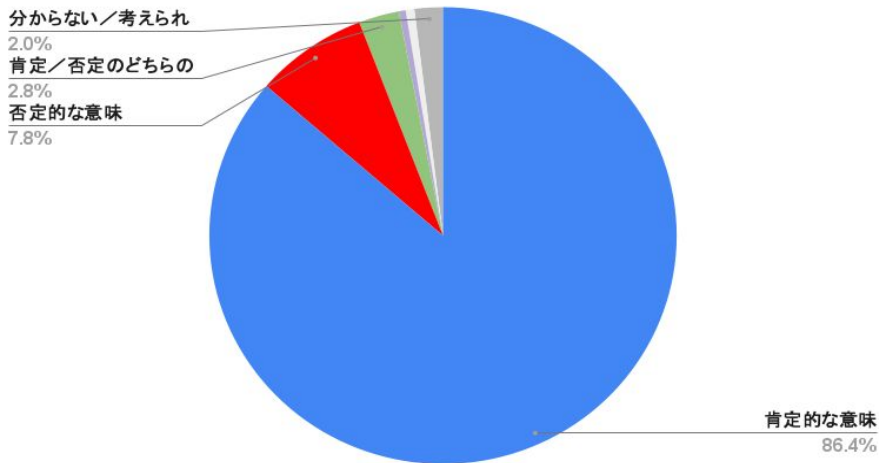
- 学校に行かなくていいよ。って両親が認めてくれて、家で過ごせたとき（40代）
- 最初は理解がなかったが、母自身勉強し、親の会などにも行き、学校に行かないことを認めてくれた。（40代）
- 腫れ物に触る感じではなく、思うことをちゃんと話してくれる大人(国語の先生、児童館職員)（30代）
- いつも深刻ではない他愛のない話をしてくれた。そのときだけ自分のアイデンティティは「学校に行けない自分」ではなかった（20代）
- 似たような境遇の友達がいた（20代）
- 話しを共感的に聞いてくれ、いつも私がどうしたいかを聞いてくれた。また、絶対に否定しないで聞いてくれた。（20代）
- 保健室の先生、不登校経験者で、いつでも保健室にきていいよと言ってくれた（30代）
- 担任教師が自宅訪問して下さり学校復帰を全く示唆せず、ただ「雑談」してくれたり、車でドライブをしてくれたこと。（40代）
- 親として不安があったと思うが、放っておいてくれた（30代）
- 保育園がボランティアに受け入れてくれたこと(そこでは当時の自分に学校に行けなくなった理由を聞いてきた先生はいなかったし、何気なく手伝ったことを認めてもらったり、保育士になる夢をサポートしてもらえたりした)（40代）
- わざわざ別室に来て理科の実験をしてくれたり、放課後に時間を割いて授業の内容を教えたりしてくれた。また、部活だけ参加するという変則的な通い方も受け入れてくれた。（30代）
- 担任 短時間の出席を許可。（50代）
- 精神科で親や主治医が私をカウンセリングに繋げてくれたこと（19歳）

不登校経験の意味

【不登校経験者調査】不登校経験者にとっての不登校の意味(n=342)



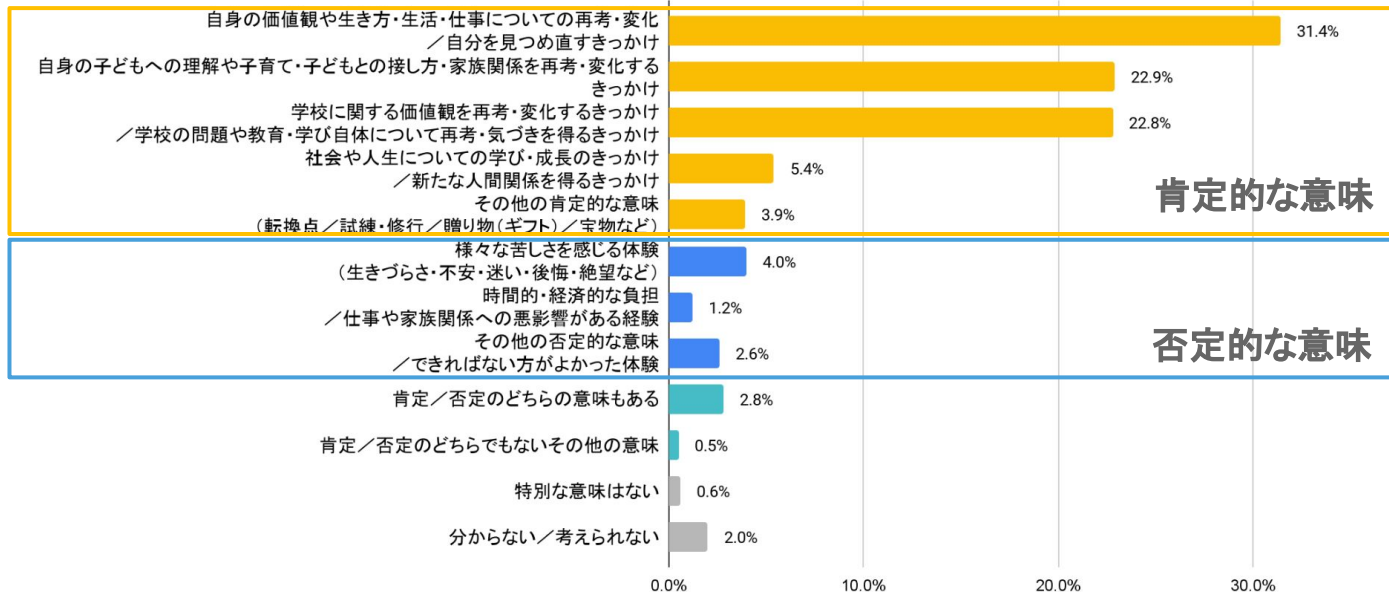
【保護者調査】保護者にとっての不登校の意味(n=1679)



保護者調査(86.4%)でも経験者調査(59.3%)でも不登校経験を肯定的に捉える記述が多かった一方で不登校経験者の4分の1が否定的に捉えていることにも留意したい。

あなたにとってお子さんの不登校はどういう意味をもちましたか？

(有効回答数1679)

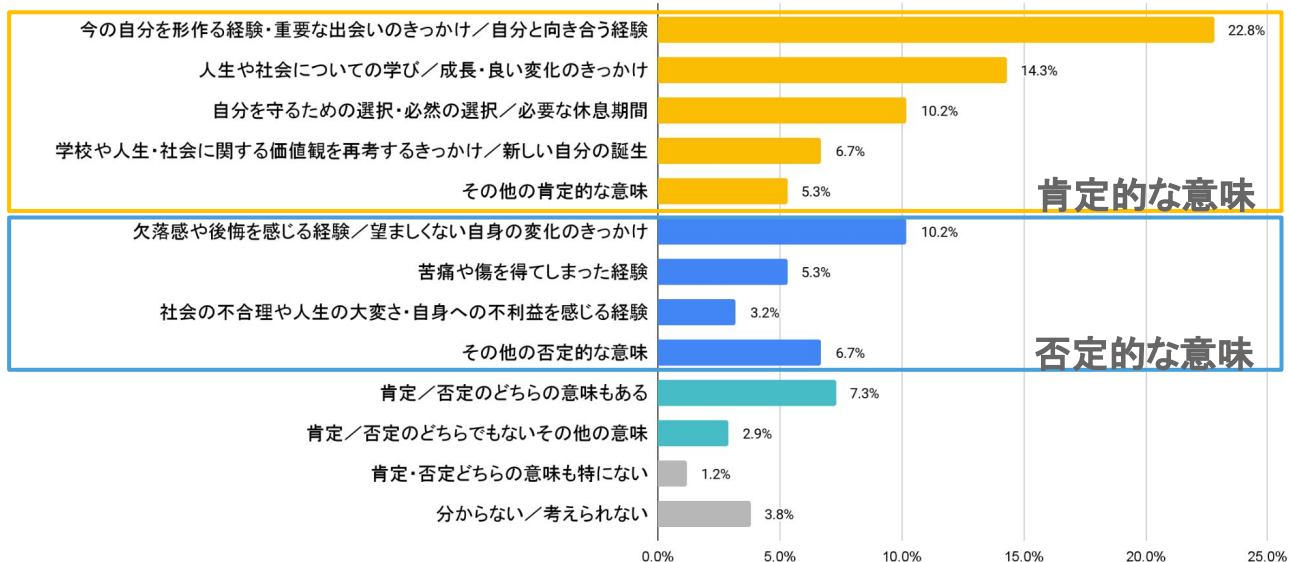


保護者調査では「価値観の再考」(31.4%)、「子育ての再考・変化を得た」(22.9%)など広い意味で価値観の変化を書く記述が多かった。否定的に捉える記述は7.8%だったが、経済的な負担や孤立感などの記述があった。

不登校経験の意味

あなたにとって不登校の経験はどんな意味をもちましたか。

(有効回答数342)



自分を形作る経験(22.8%)、社会についての学び(14.3%)など価値観の変化につながるという回答が多かった。否定的な記述は、「欠落感・後悔などの経験」(10.2%)、「苦痛や傷となる経験」(5.3%)、「社会の不合理、自身の不利益となる経験」(3.2%)、「その他の否定的経験」(6.7%)があり、合計すると25.4%となり当事者にとって負の側面が書かれていた。

不登校経験の意味【記述から】

- 「自分の固定観念や価値観を改めて見直すきっかけとなった。知らず知らずのうちに自分の思い描く未来像を押し付けていたことに気付かされました。多様性を自覚し、他の人にも優しい目を向けられるようになった。」（保護者調査・40代・母親）
- 「自分の価値観をひっくり返す出来事で、自分が生きやすくなりました」（保護者・50代・母親）
- 「教育とは何か、学校の真の役割はどこにあるのか、という本質を考え直すきっかけとなりました。子どもには感謝しかありません」（保護者・40代・母親）
- 「つらくて苦しい 誰も助けてくれない」（保護者・40代・母親）
- 「不登校自体はつらくないが、自分の仕事や家計への影響が大きい」（保護者・40代・母親）
- 「無理に登校していたらしんでしまったかもしれないので、しなずにすんだ」（経験者・20代・性別無回答）
- 「学校に行かなくても人生終わりじゃないし、将来全然生きていける。自分がやりたい事を見つけた時になんとか動き出しても間に合うし、本当の意味で自分の身になるという事に気付いた」（経験者・20代・女性）
- 「『普通』に対して懐疑的になれた」（経験者・30代・女性）
- 「いまの自分自身を形作るために必要だったもの」（経験者・40代・男性）
- 「様々な社会問題に気付くきっかけになった」（経験者・30代・女性）
- 「何もない 普通の人が持っているものが何もない」（経験者・20代・女性）



参考資料

調査を行う前のプレ調査で行った不登校経験者4名のワークショップから

活字の本は無条件で買ってくれた

くんはくんのままで大丈夫。なんだこのくそばあ。3年後にああそうか。

最初は疑う。

伴走支援型の支援がもっとあるといい

普通に戻った感

大丈夫の称号が欲しかった

1000人の不登校が物理的にみれたとき

親も子も自分だけじゃない

孤独感 孤立感が強い

公務員試験のための学費を出してくれた。一方で合否は気にしないでくれた

家族からの「ありがとう」という言葉

母が同じRPGゲームをしたくれた(共通の話題)

家事や料理を家族が喜んでくれた

コミュニケーション上手いかなかったりまた欠けてる部分を再確認した

わかりやすい称号(資格など)をえた(⇒結果的には長続きしなかったです)

大学に受かり直した

全国合宿が転機

学校に無理やり行かせないで欲しかった

公務員試験という挑戦を無条件で応援してくれた

親が「は大丈夫だよ」と根拠のない保証をした

好きなことに没頭させてもらえた

美味しいごはんを用意してくれる

感謝 自己有用感ここにいていいんだ

よくがんばったねえの言葉(ただし結果的には弱った)

心配しないで欲しかった

生きる楽しみの一つ

学校を卒業したとき(ようやく離れられる的な)

気にされない、けど、動きたい時に動かさせてくれる(資金も)

大人に対する失望から一個光が見えた瞬間

その人に寄り添っていない支援をされた時放っておいてくれよ

母がカウンセラーの先生に話を聞いてもらっていたらしく、子どもである私への関わり方が変わった。

なんでいけないんだという質問はやめてほしい。大人の期待に沿う答えを求められている

うれしかったこと

フリースペースのような塾に行つて癒された。女子同士のネチネチした関係がなくて安らいだ。

いいタイミングで見てくれて引きずりだしてくれた(今でないとはだめだと思うんです!)の言葉)

フラット

うれしい支援はあまりなく、静かにしてくれるのが一番の支援

社会に出てから。そういうことあるよね。

人として尊重してほしい。親の所有物みたいな感覚を持たないでほしい

カウンセラーの先生が、不登校の同じ世代の子を紹介してくれた(唯一今も友達付き合いがある地元の方)

親が親の会に行ってくれた

ジャズダンスの先生が不登校のことを気にせずアシスタントにしてくれた

趣味のコミュニティ

ただの人として扱ってもら

親そのままで大丈夫だよ

不登校を腫物扱いせずいてくれる

ごく普通のやりとり("普通の人")として関わってくれた)

最初から「学校」以外の選択肢を示してほしかった

肯定→信頼→その人から世界が広がる

カウンセラー(民間の方)の先生と初めて会って話した時に「それは学校行きたくないと思つて当然よ〜」と言ってくれたこと。学校に行かない事をポジティブに言ってくれた初めての大人だった。

担任の先生、保健室の先生がちゃんと話を聞いてくれた

親が基本的な知識を得てとても楽になれた。このおかげで生きてこれた

ネットを止められる

本を片付けられる、捨てられる

それしかできないのに、やめることをやめると言われる

経済的自立ができないんじゃないか

普通になれていない自分を勝手に感じて辛くなる

横の部屋で同期が楽しそうにしている

制服を着た子たちと同じ電車に乗る状況

教科書が視界に入ること

本当にやめてください

好きなこと(もの)の阻害

劣等感を刺激する

他の人と同じ事ができていない = 公務員の内定が決まった瞬間に極めて小さくなった

基本的にずっと劣等感

学校行ってないんだからせっかくだし キャンプ行ったら

「早く治ってね」という手紙を友達からもらったこと(先生に書かされた?)

さほど親しく無いクラスメイト全員からの「お手紙」

腫れ物に触るように接されること

学校行ってほしい味する。

友人に「私は我慢して学校行っているのに」と言われる

いやだったこと

心配の押し付け

腕掴んで学校に連れて行こうとして家から出そうとして柱にしがみついて泣いた

心配の押し付け

登校の促し

限定的な肯定 = 否定感を表される。今を否定される

外側から積極的に刺激をされて嫌

たまに会う親戚から「学校行かないの?」と聞かれる

今後どうなるか見通しをつけずに学校に行けと言われる

勉強のことしか心配しないこと

絶対に布団から出ない状況

心配されること

それはお前の将来が心配なんだろ

学校にいけなければフリースクール行ったらと言われる

いい友達がいると言われる

あなたの将来が心配

良い先生がいると言われる

家庭訪問

毎日先生が家に来た

いつ学校に行くか聞かれる

家庭の中でずっと出されていた

親が「自分の子育てが悪いからこんな子になったんだ」と自分を責める空気を出すこと

枕元で親に泣かれる

自分の不安をぶつけること

[苦しさ強化要因]

親・周囲からの圧力

- ・登校刺激・不安押し付け
- ・心無い声掛け・不登校への制裁

学校からの圧力

- ・求めている家庭訪問・級友からの手紙
- ・様々な劣等感刺激・しっくりしない支援

不登校経験者との付箋ワークをM-GTA分析を行い図式化した

[初期の渦中の心情・行動]

自己否定

- ・無限自己内省
- ・孤独

苦しさを自分を守る

- ・ひきこもる・何かに没頭
- ・セルフネグレクト・刺激への過敏さ
- ・低刺激

[少しずつ自己を回復]

微かな始動

- ・家事と家族への関わり開始
- ・クリエイティブ作業始動
- ・夜⇒遠方⇒近所への外出
- ・安心できる場への参加
- ・推し活
- ・好きなことへの没頭
- ・ゲーム・読書内容の変化

[他者との交流]

他者につながり

- ・オンラインでのつながり
- ・同経験者との出会いとつながり
- ・異世代との交流
- ・貢献感

[次の人生期へ]

次の人生ステージへ

- ・自己受容・合格
- ・卒業

学習への意欲

- ・進学・資格取得

親との関係変化

ネット友の存在

学校・その他サポート

- ・担任・保健室・カウンセラー
- ・本人を受容、傾聴

親の会サポート

- ・不登校への理解

親の心情・行動変化

- ・肯定の声かけ・様々な応援

新たな居場所との出会い・つながり

- ・いい人間関係による癒しと支援
- ・カウンセラーの肯定

[回復する環境要因]

不登校の時系列

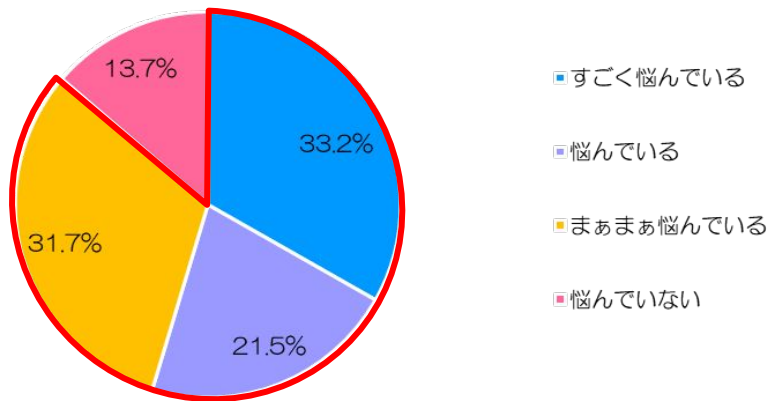
不登校経験からの心理・行動変化



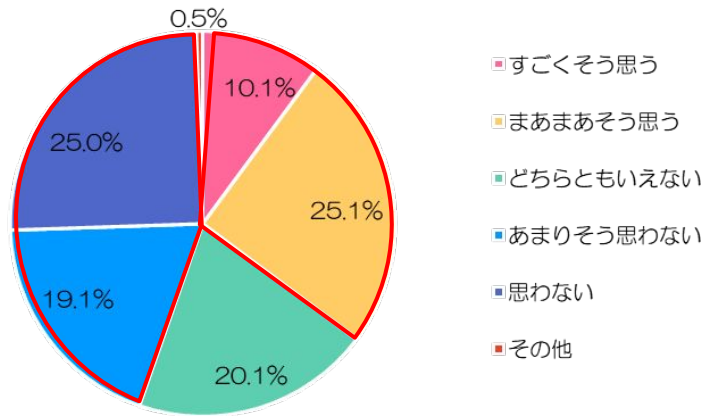
居場所の価値の見える化調査

昨年度発表資料より

現在子どもへの対応または子どもの将来について
どれくらい悩んでいますか (n=1,930)



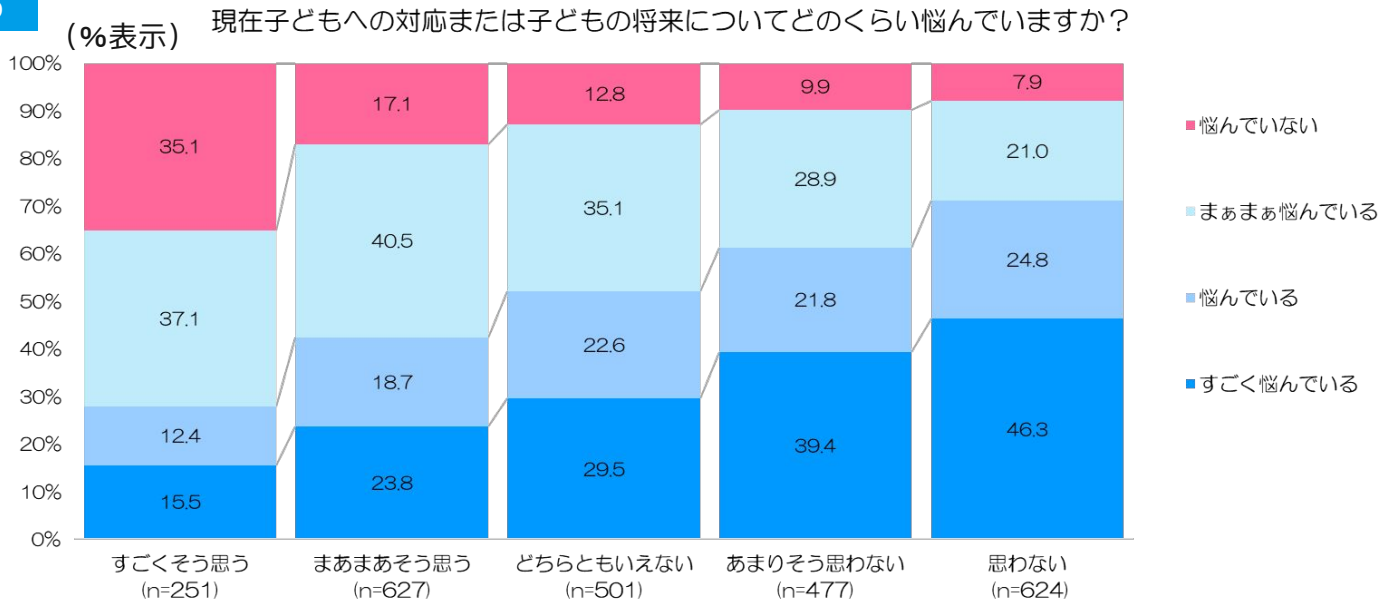
お子さん本人にとって適切な居場所(学校含む)に
出会っていると思いますか? (n=2,499)



「現在子どもへの対応または子どもの将来について」、「すごく悩んでいる」「悩んでいる」「まあまあ悩んでいる」を合わせると86.3%に達した。また、「お子さん本人にとって適切な居場所(学校含む)に出会っていると思いますか?」に対しては「思わない」「あまりそう思わない」の合計が44.1%になり、「すごくそう思う」「まあまあそう思う」の合計35.3%を上回った。

適切な居場所と子どもの対応について

昨年度発表資料より



お子さん本人にとって適切な居場所(学校含む)に出会っていると思いますか？

保護者から見て、子どもが適切な居場所に出会っていることと、子どもの対応や将来への悩みは関連することがうかがえた。一方で、適切な居場所に出会っていても「悩んでいる」と回答した保護者も64.9%おり、保護者支援がさまざまな形で必要なことがうかがえた。

居場所の価値の見える化調査

調査の目的：「居場所の価値」はなかなか数値化、定量化ができない。それが行政支援が進まない障壁になっていないだろうか？そこで居場所を利用する子ども・若者・保護者、居場所を運営するスタッフからのヒアリングを通じて「居場所の価値」および価値を生成する関わりを明らかにする。

調査の概要：4カ所の民間フリースクールにご協力いただき、13名の居場所利用者&元利用者、4名の保護者、5名のスタッフを対象にインタビューを行った。得られたインタビューデータを対象にM-GTAによって分析した。

調査先：本調査では、学校制度外の居場所・学び場として機能してきた民間フリースクール・フリースペースに焦点を当て、20年以上の実績があり、**子どもの意思・ペースに寄り添った居場所づくりを行っている団体**から4つを選定することとした。

本調査における留意点：全てのフリースクールにおいて今回の調査結果のような価値が創出される保障があるわけではないこと、また同フリースクール内においても全ての子どもが、同様の価値を感じる保障があるわけではないことも合わせて留意いただきたい。

居場所接続前の状態

- 他者軸で行動する
- 自分を隠す
- 学校に行かなくてはならないというプレッシャー
- 学校が怖い
- 学校は強制的に連れていかれる場所
- 心身状態の悪化
- 受け止めてもらえない不安
- 学校に行けないことへの自己否定
- もう少し頑張れるのではないかという自責の念
- 日中家で過ごしていることへの罪悪感

居場所接続初期

- 学校に登校しなくてはならないというプレッシャーからの解放
- どこかに接続できている安心感
- 学校にいけていないのは自分だけではないという安心感
- いじめられるかもしれないという不安
- 怖い場所かもしれないという不安
- 勉強をしなくてはならないという意識
- 居場所に行くための勇気と元気が必要

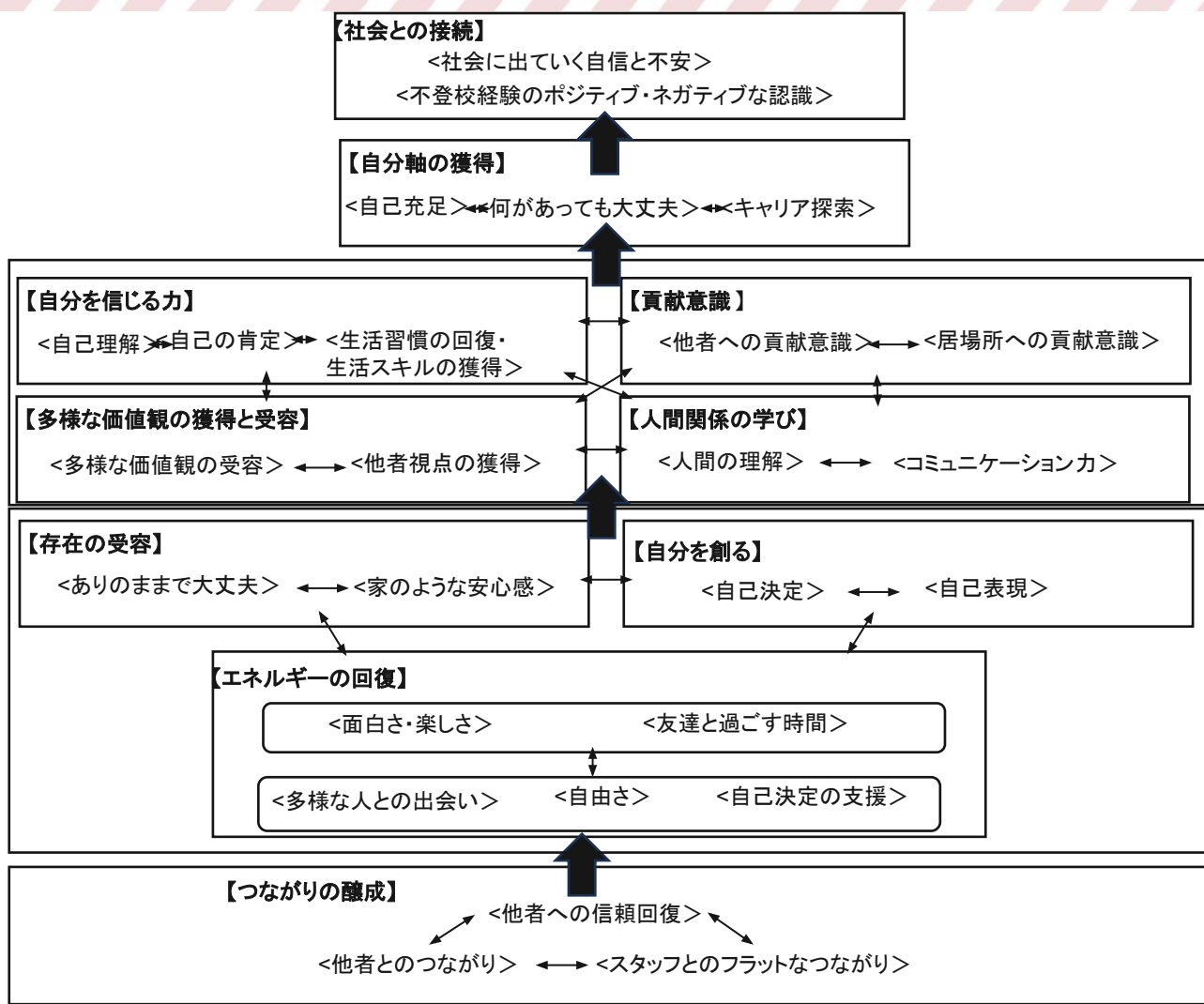
社会適応
・活躍期

自己発展期

自己成長期

自己の
回復と創造期

居場所つながり期



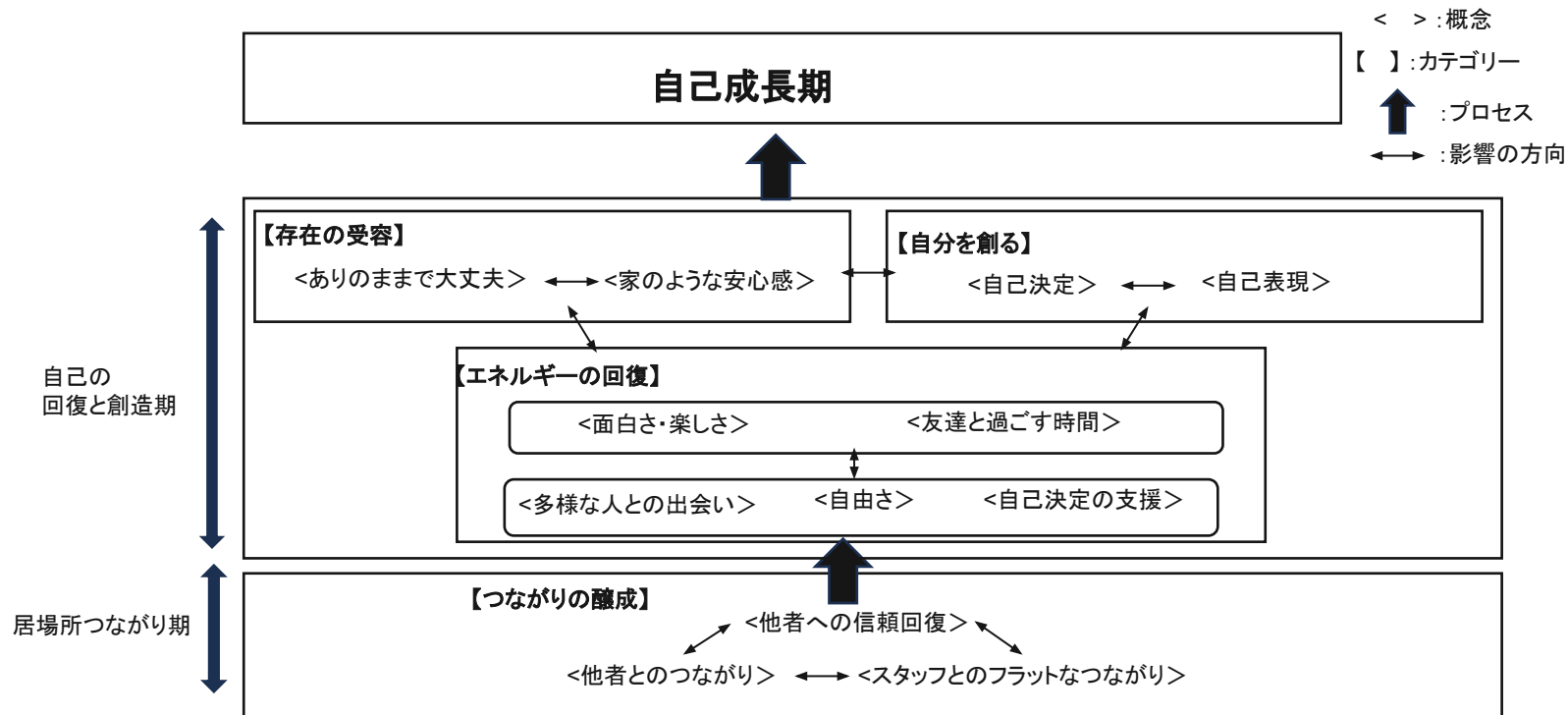
< > : 概念

【 】 : カテゴリー

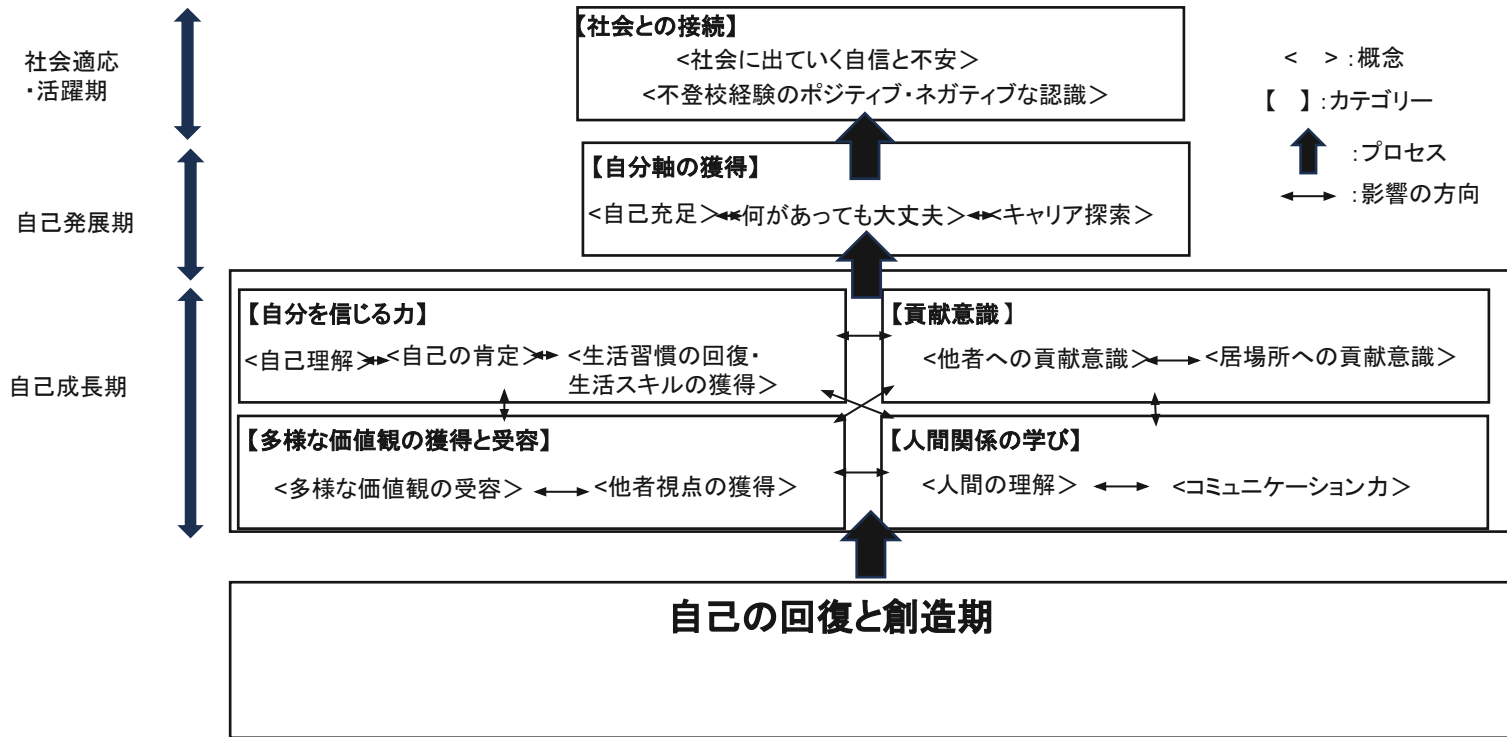
↑ : プロセス

↔ : 影響の方向

居場所つながり期から自己の回復と創造期まで



自己成長期から社会適応・活躍期まで



社会適応
・活躍期

自己発展期

自己成長期

自己の
回復と創造期

居場所つながり期

【社会との接続】
<社会に出ていく自信と不安>
<不登校経験のポジティブ・ネガティブな認識>

【自分軸の獲得】
<自己充足> <<何があっても大丈夫>> <<キャリア探索>>

【自分を信じる力】
<自己理解> <<自己の肯定>> <生活習慣の回復・生活スキルの獲得>

【貢献意識】
<他者への貢献意識> <居場所への貢献意識>

【多様な価値観の獲得と受容】
<多様な価値観の受容> <<他者視点の獲得>>

【人間関係の学び】
<人間の理解> <<コミュニケーション力>>

【存在の受容】
<ありのままで大丈夫> <<家のような安心感>>

【自分を創る】
<自己決定> <<自己表現>>

【エネルギーの回復】
<面白さ・楽しさ> <友達と過ごす時間>
<多様な人との出会い> <自由さ> <自己決定の支援>

【つながりの醸成】
<他者への信頼回復>
<他者とのつながり> <<スタッフとのフラットなつながり>>

< > : 概念

【 】 : カテゴリー

↑ : プロセス

↔ : 影響の方向

保護者、スタッフへのヒアリング

保護者から見た価値 (抜粋)	ありのままの子ども の受容	子どもにとって安心 できる場	子どもが変わる・成 長	保護者自身の安心感
	保護者自身の安堵・ 喜び	保護者自身の学び・ 価値観の受容		
居場所運営者の関わり (抜粋)	ありのままを尊重	存在を祝福する	一人一人に添った関 わり	自己決定を支える
	多様な人・価値観と の出会い	やりたいことを応援	子ども主体の場を共 に創る	学校との連携／保護 者支援

保護者の表出では、ありのままの受容や自由、エネルギーの回復という子どもと同じ価値が出ている他、いつでも頼れる・相談できる、保護者の不安に対する理解など保護者自身も受容され安心感を得られていること、同じ境遇の保護者と知り合える、休息がとれる、子供との関わり方を教えてくれる、情報提供などの側面があるなど保護者自身に対する価値が生成されていることが分析から読み取れた。スタッフについては、子ども一人一人に寄り添った関わりとありのままを受容する関わりが価値実感に対応していることが分析から読み取れた。

詳しい調査分析結果はこちら

https://www.tayounamanabi.com/_files/ugd/c7715d_96166d8ada694c3e8194ef36bf9415f1.pdf



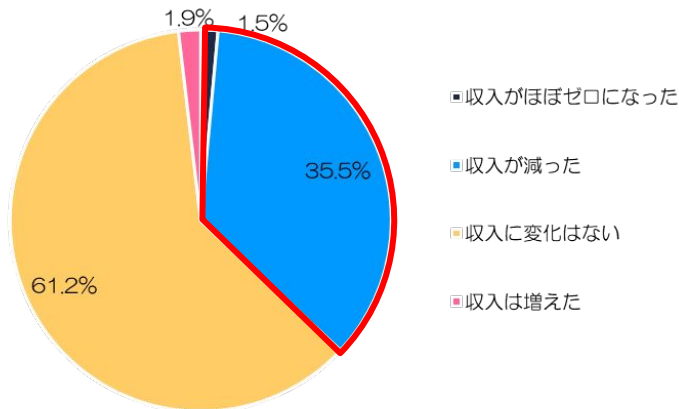
官民連携グッドプラクティスヒアリング調査

保護者

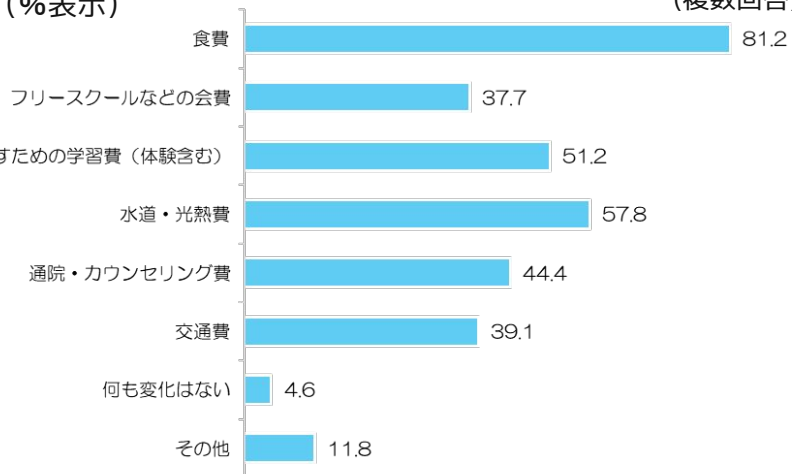
こどもの不登校をきっかけに世帯年収が減ったと回答した保護者は4割近く
一方回答したほぼ全ての保護者が支出が増えたと回答

昨年度発表資料より

お子さんの不登校をきっかけに
世帯年収は変化しましたか？ (n=1,929)



不登校をきっかけとした以下の支出はありますか (n=1,935)
(%表示) (複数回答)

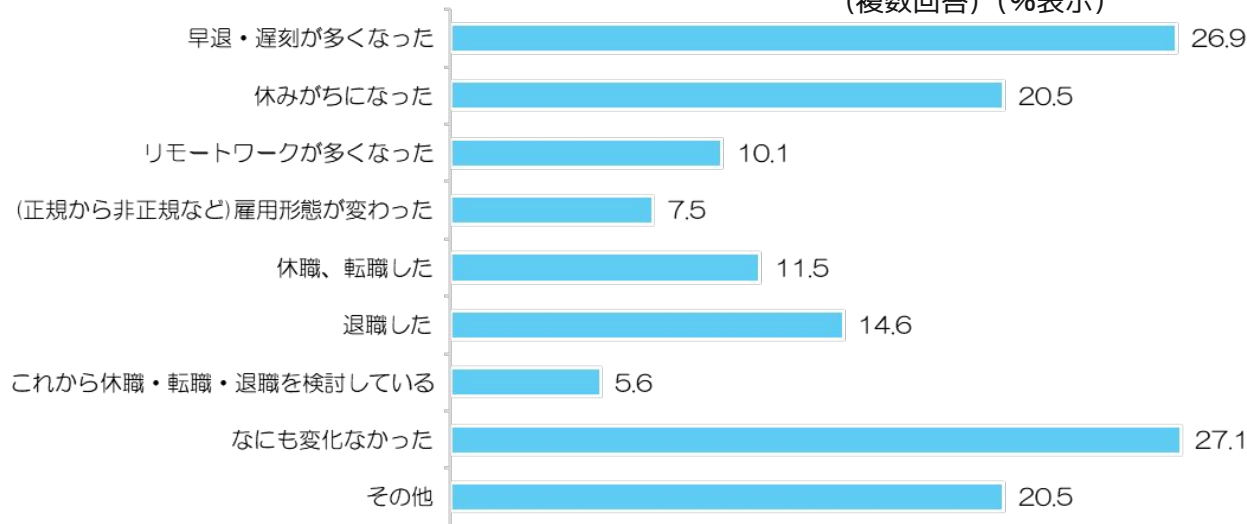


全体の99.5%がいずれかの支出があると回答した。

36.9%の保護者が「こどもの不登校をきっかけに世帯年収が減った（「収入がほぼゼロになった」と「収入が減った」の合計）」と回答した。また99.5%の保護者が「不登校をきっかけに支出があった」と回答した。

昨年度発表資料より

子どもの不登校がきっかけで変化した働き方は (n=1,935)
(複数回答) (%表示)

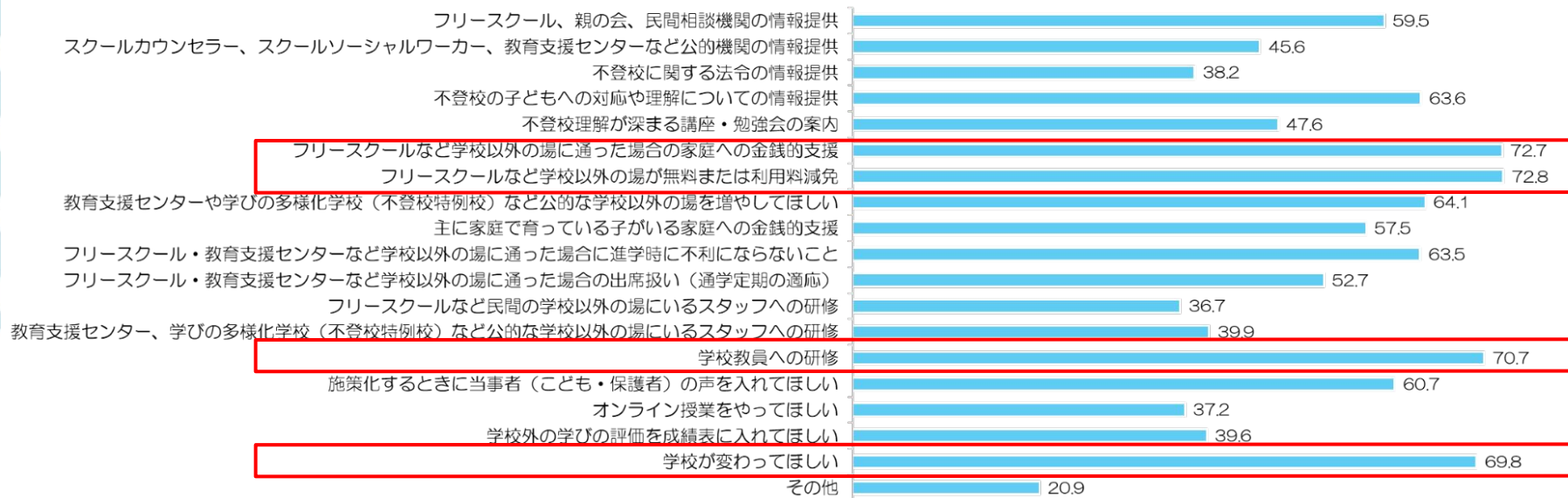


「早退・遅刻が増えた」「休みがちになった」「雇用形態が変わった」「休職、転職した」「退職した」「これから休職・転職・退職を検討している」と回答した割合が多く、こどもの不登校をきっかけに、収入にかかわる働き方の変化があった・あることがうかがえる。雇用形態の変化とリモートワーク、転職の背景には、働き方の変更を余儀なくされた事情がうかがえる。

保護者が行政に望むもの

昨年度発表資料より

あなたが行政に望むものを選んでください (n=有効回答数1935) (複数回答)



昨年度の調査で「保護者が行政の望むもの」の上位2位は「フリースクールなど学校以外の場が無料または利用料減免（72.8%）」と「フリースクールなど学校以外の場に通った場合の家庭への金銭的支援（72.7%）」であった。

他の自治体での公的支援、
うちの自治体でも始めてほしい

自治体に働きかけてみたいけど、
何からやればいいのかわからない。
どうやったら実現に進むの？

調査概要：官民連携グッドプラクティスヒアリング調査

■調査目的

先行自治体での、民間と行政が連携するまでの

①ストーリーおよびプロセス—なぜこの施策が生まれ、どのように進展したか。その過程での障害や関係者間の役割分担は？

②現状の成果や課題、今後の展望をヒアリングし、他の自治体へ展開するための「レシピ集」とする。

■調査概要

フリースクールを利用する家庭やフリースクールへの経済支援など、官民連携して多様な学びの環境を構築した先行自治体にて、多様なステークホルダーにヒアリングを行い、それぞれの立場からの視点で語っていただき、事例や共通する要素を類型化しまとめました

調査にあたっておいた問い

“実際に施策化がはじまったきっかけは？”

“どんなプロセスで、誰がなにをした？”

“官民連携が進む地域と進まない地域の差はなに？”

地域の民間団体からあがった悩み

(行政に対して感じていたこと)

- 対話の機会がそもそもない
- 不登校に対して関心が薄く、しっかりと話をきいてくれない
- 不登校に関する理解がじぶんたちと異なり、かみ合わない
- 国の施策に対しても十分に浸透していない(理解されてない)

関係性がなく、必ずしも不登校に関する取り組みは優先順位が高くない関係者と、どうやって共通理解を深め、同じ課題感をもてるようになるか？

行政担当からあがった悩み/振り返り

(実務上直面した難所)

- 効果的施策はなんなのか、まず何からやればいいのか
- 予算/人員が少なくてもできることはなにか
- 官民連携で目指す方向や全体のデザインをどう定め、どう制度に落とし込むか、その際は、なにを検討の時の軸(拠り所)にするか

必ずしも不登校領域に関する知見や関係者とのつながりが十分でない状態で、多様な関係者と上手く取り組みを詰めていくにはどうすればいいか？

民間団体・行政共に有効な取り組み

1. 民間団体は自団体の運営と支援スキルをしっかりと確立する
2. 「こどもをまんなか」に、目指すゴールのイメージをみんなで握る
3. 多様な関係者との関わりの幅を広げる
4. コミュニケーションの頻度と質を上げる～相手への敬意と信頼
5. 小さく始めて、育てていくことを前提にする

先行自治体において確認された行政連携の大きな成果

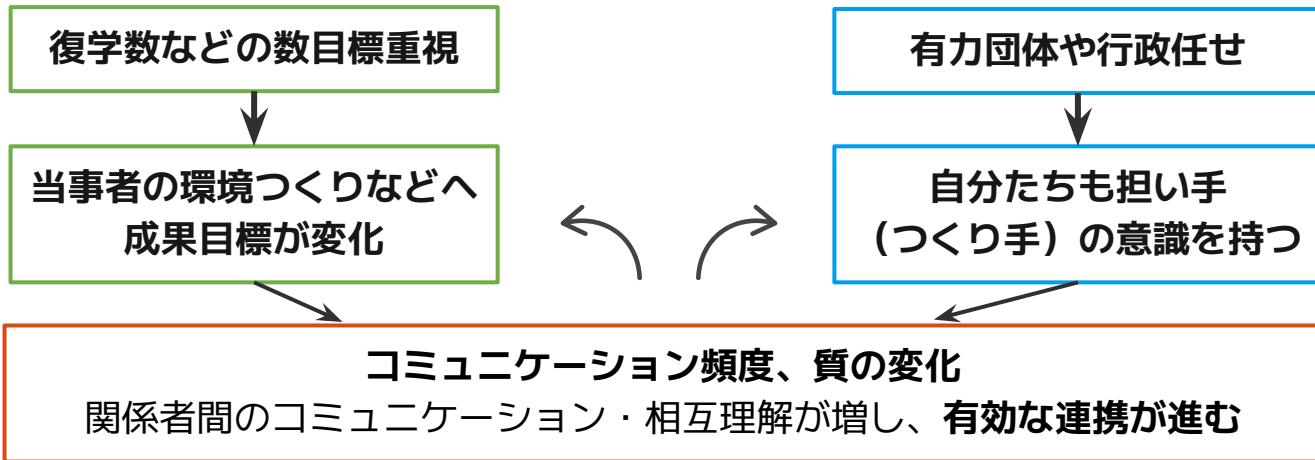
行政側

実際の当事者や民間運営者と出会う中で、復学数などの目標数から当事者の環境づくりなど成果目標の変化、不登校観・こども観の変化などが起きる

視座の変化

民間側

有力団体や行政が進める、ではなく、自分たちも地域社会の担い手（つくり手）のリーダーの意識がもてるように



(参考) II. 民間団体等関係者との関係づくり

事例

行政担当
(首長部局等)

先行自治体での事例 (滋賀県草津市)

- 保護者向けの情報提供リーフレットを文科省のフォーマットを元に作成、関係者で活用・紹介できる形とした

※リーフレット本体の公開先はこちら

- 相談に来た保護者に対して適切な説明資料がない、という課題があり、保護者向けの情報提供のリーフレットの制作を行なった
- 制作にあたっては、文部科学省のフォーマットを参考に作成をおこなった
- 同資料は、関係者（学校の教員や医師）等にも共有し、説明資料として必要に応じて判断・使用いただけるようにした
- 資料はWebでも公開し、随時最新のものに更新することで紹介・入手できるようにした
- 保護者向けの作成という目的に加えて、教員の方向けへの情報の整理・提供、という目的も置いていた
- 結果として、関係者が保護者への行政施策の告知を連携して行える形となっている

Copyright© 2023 NPO法人多様な学びプロジェクト All Rights Reserved.

具体的な実践事例、取り組み例はぜひ報告集をお読みください

「官民連携グッドプラクティス」ヒアリング調査報告書

https://www.tayounamanabi.com/files/uqdc7715d_4084640ec5bc4cf9a004132591b13e11.pdf

(参考) ①. 助走期でのグッドプラクティス：連携を促進させる取り組み

事例

民間団体

コミュニケーションシート (むすびつくば/茨城県つくば市)

むすびつくばでは、保護者との共有用に、子どもたち一人ひとりの生活の様子、学習状況について記入したコミュニケーションシートを作成しているが、保護者・生徒児童の許可の元、同じ内容の報告書を出席日数とともに所属する学校にも送付している。情報の共有を行なうことで、連携した支援の実現の他、団体・学校間の関係性の構築にもつながっている

※むすびつくばについてはこちら

(むすびつくば様提供資料より)

具体的な実践事例、取り組み例はぜひ報告集をお読みください

「官民連携グッドプラクティス」ヒアリング調査報告書

https://www.tayounamanabi.com/_files/ugd/c7715d_4084640ec5bc4cf9a004132591b13e11.pdf



不登校前後の課題の構造化

不登校前後の構造化ワークショップ

システム思考の小田理一郎さんをお迎えし、文科省、こども家庭庁、自治体教育委員会、教員、NPO、居場所運営者、保護者、不登校経験者それぞれから見える「不登校前後の社会課題と支援策について」構造化するワークショップを2024年7月と10月に2回開催

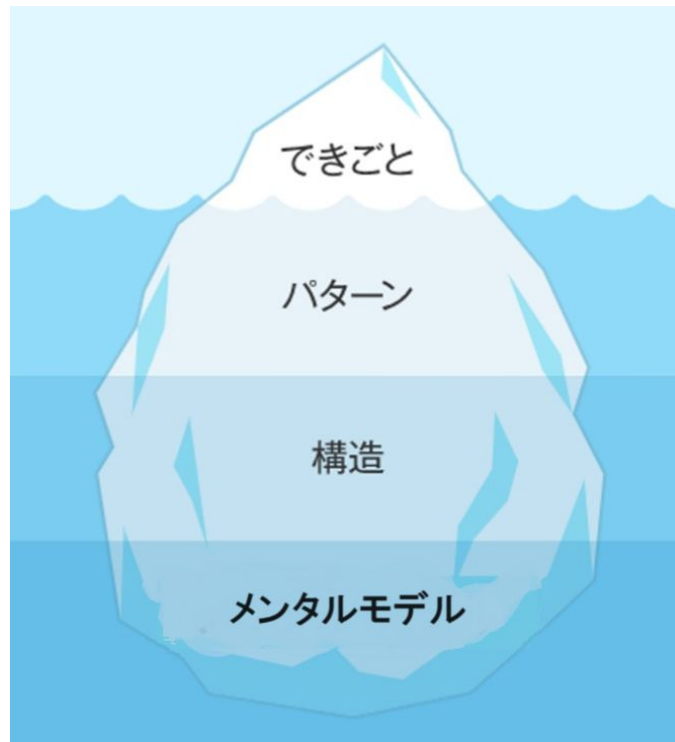
→これを元にシステム図を作っていました。

注意点：これが正解ではなく、これを下書きにそれぞれの現場の知見で更新されていくものです。



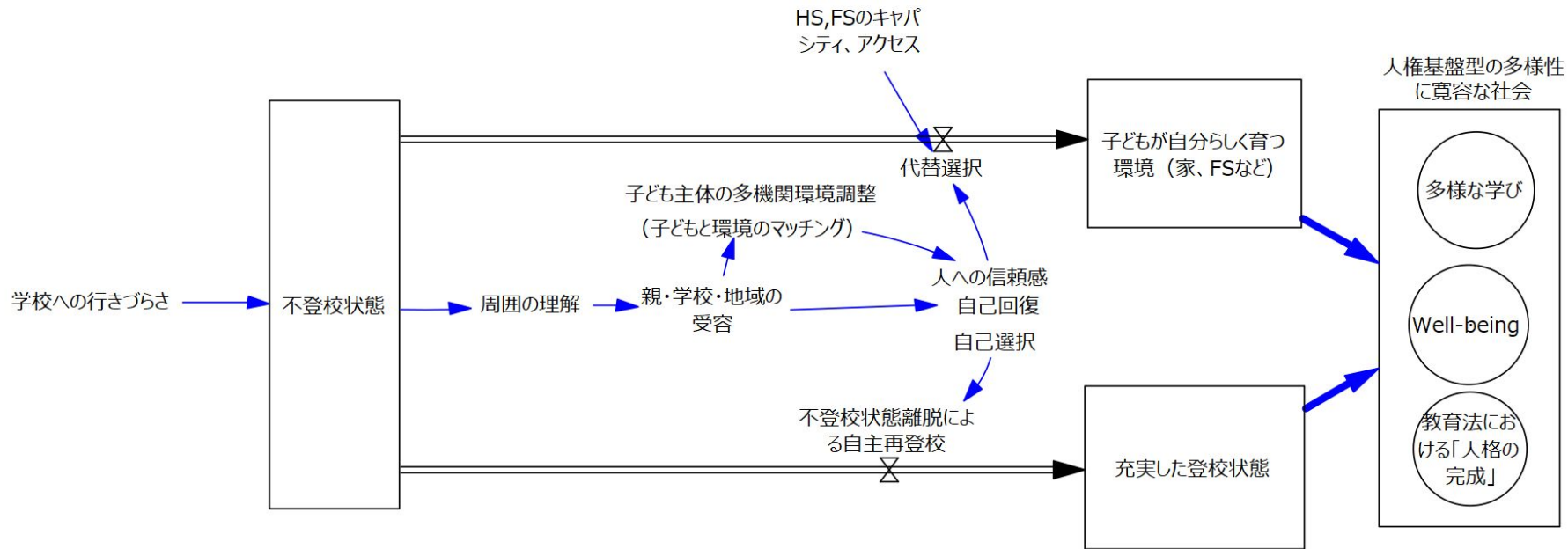
システム思考は複雑・不確実な状況下において、 大局・全体像・根本を見るものの見方・思考法

システム：2つ以上の要素がつながって相互に作用し合う集合体

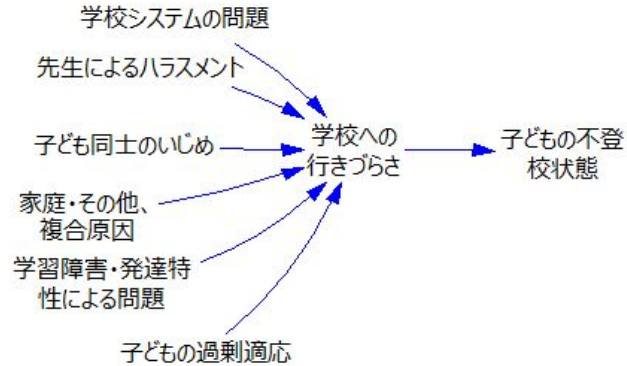


車の故障などの技術的な問題は、エンジニアなどの専門家がその原因を特定して対策をとることで解決できることが多い。しかし、社会課題、とりわけ、慢性的な課題は、できごとレベルで「問題が起きた」ことへ対処してもせいぜい短期の効果にとどまり、多くの場合かえって状況を悪化させることが多い。なぜその問題が繰り返し起こるのか、関係者の行動やパターンを観察し、そうした行動やパターンを引き起こす構造を探求する必要がある。複雑に絡み合った構造の課題は、その構造そのものを変えなければ生じるパターンを変えることは難しい。しかるに構造を変えることは、多くの関係者にとっての認識、行動、目標などの前提を相互に理解し、共通理解や共通目標に向かって連携した行動変容を必要とする「適応課題」となる。システム思考は、表面的にできごとへ対処する在来型のアプローチと異なり、より深いレベルでの大局、全体像、根本を探求するアプローチである。

不登校状態の解決 = 「学校に行く」 ことではなく、 その子らしく育つ環境から、ウェルビーイング（安心で幸せ）が高い人生を送ること



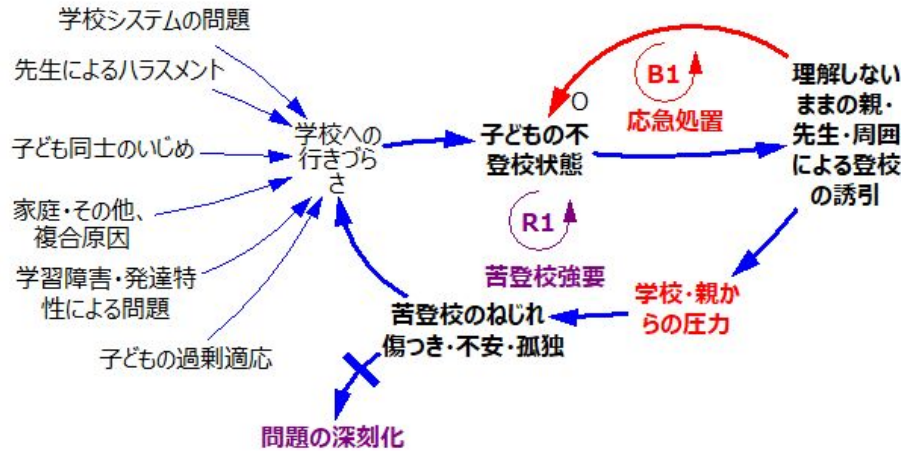
不登校システム図： 不登校状態の主な発生原因



不登校状態はさまざまな原因から起こる

- 青矢印: 増減が同じ向きの因果関係
- 赤矢印: 増減が逆向き(O)の因果関係
- 矢印上の二重線: 遅れのある因果関係
- 赤字: 阻害要因、副作用の強い解決策
- 緑字: 促進要因、より望ましい解決策
- R: 自己強化型ループ(好循環、悪循環など)
- B: バランス型ループ(応急処置、根治策など)

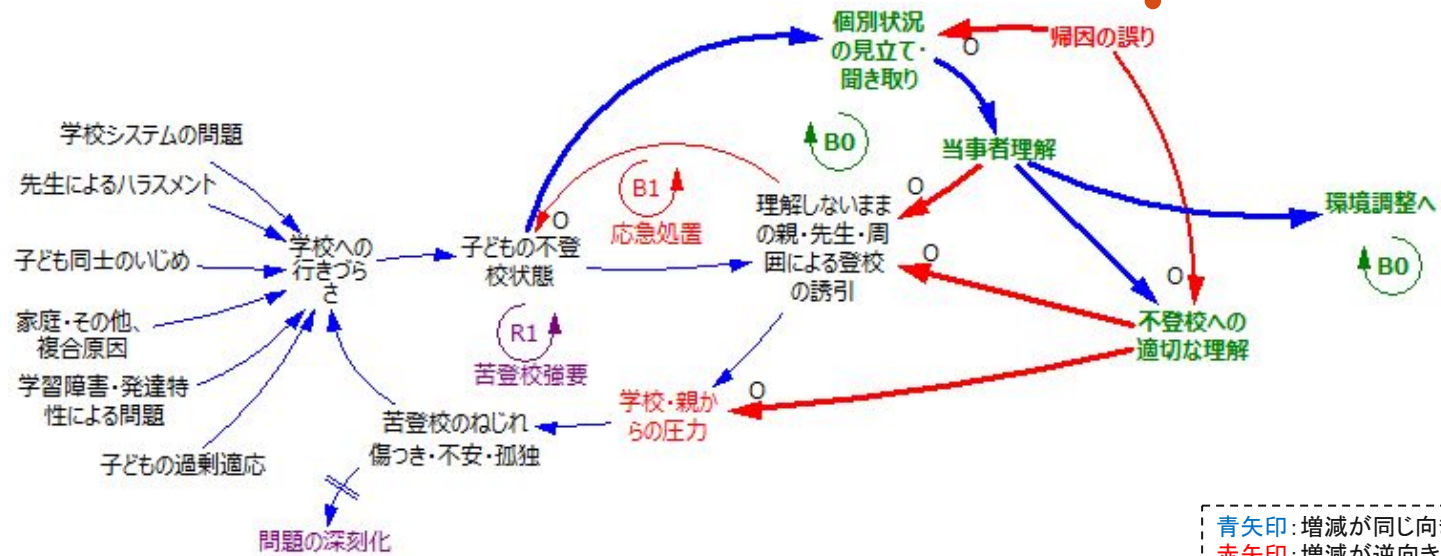
不登校システム図： うまくいかない応急処置



安易な応急処置 (B1)は苦登校強要による悪循環 (R1)や問題の深刻化を招く

- 青矢印: 増減が同じ向きの因果関係
- 赤矢印: 増減が逆向き(O)の因果関係
- 矢印上の二重線: 遅れのある因果関係
- 赤字: 阻害要因、副作用の強い解決策
- 緑字: 促進要因、より望ましい解決策
- R: 自己強化型ループ(好循環、悪循環など)
- B: バランス型ループ(応急処置、根治策など)

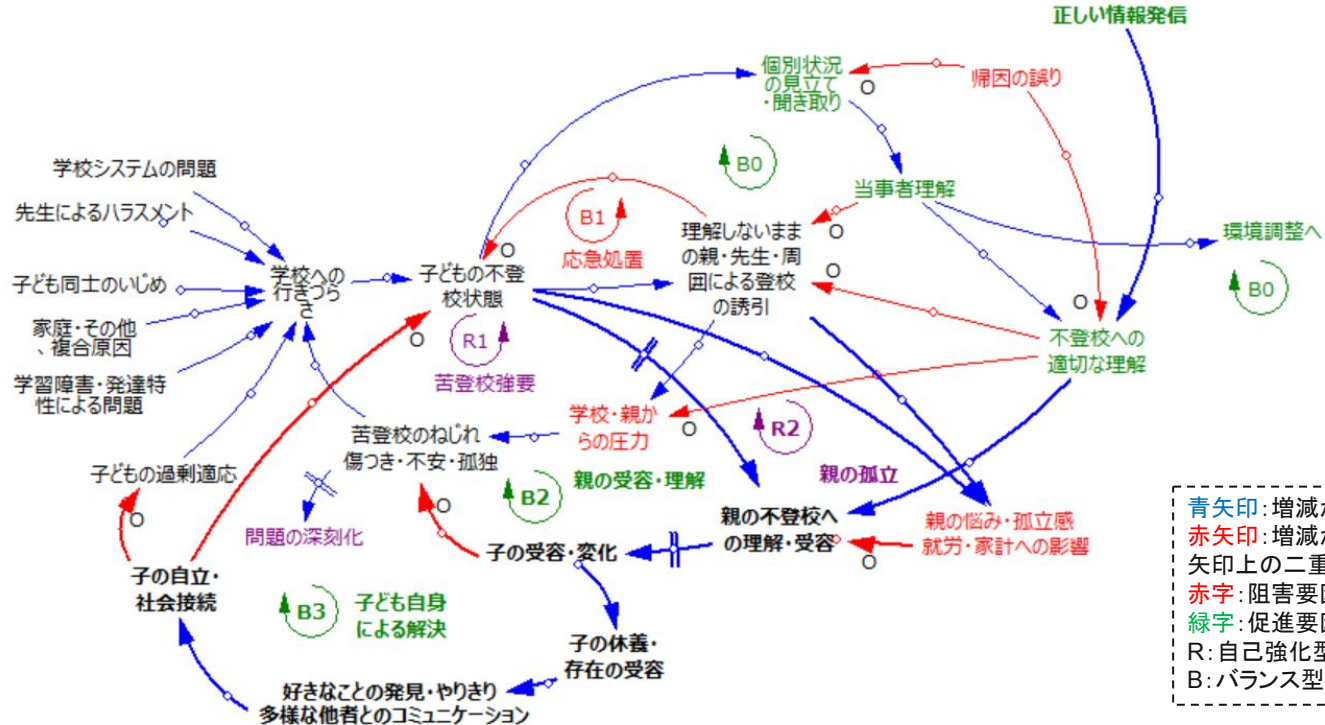
不登校システム図： 根本的な解決策（1） 当事者理解



**帰因の誤り、安易な応急処置を避けて
当事者理解をもとに環境調整（B0）へ**

青矢印：増減が同じ向きの因果関係
 赤矢印：増減が逆向き(O)の因果関係
 矢印上の二重線：遅れのある因果関係
 赤字：阻害要因、副作用の強い解決策
 緑字：促進要因、より望ましい解決策
 R：自己強化型ループ(好循環、悪循環など)
 B：バランス型ループ(応急処置、根治策など)

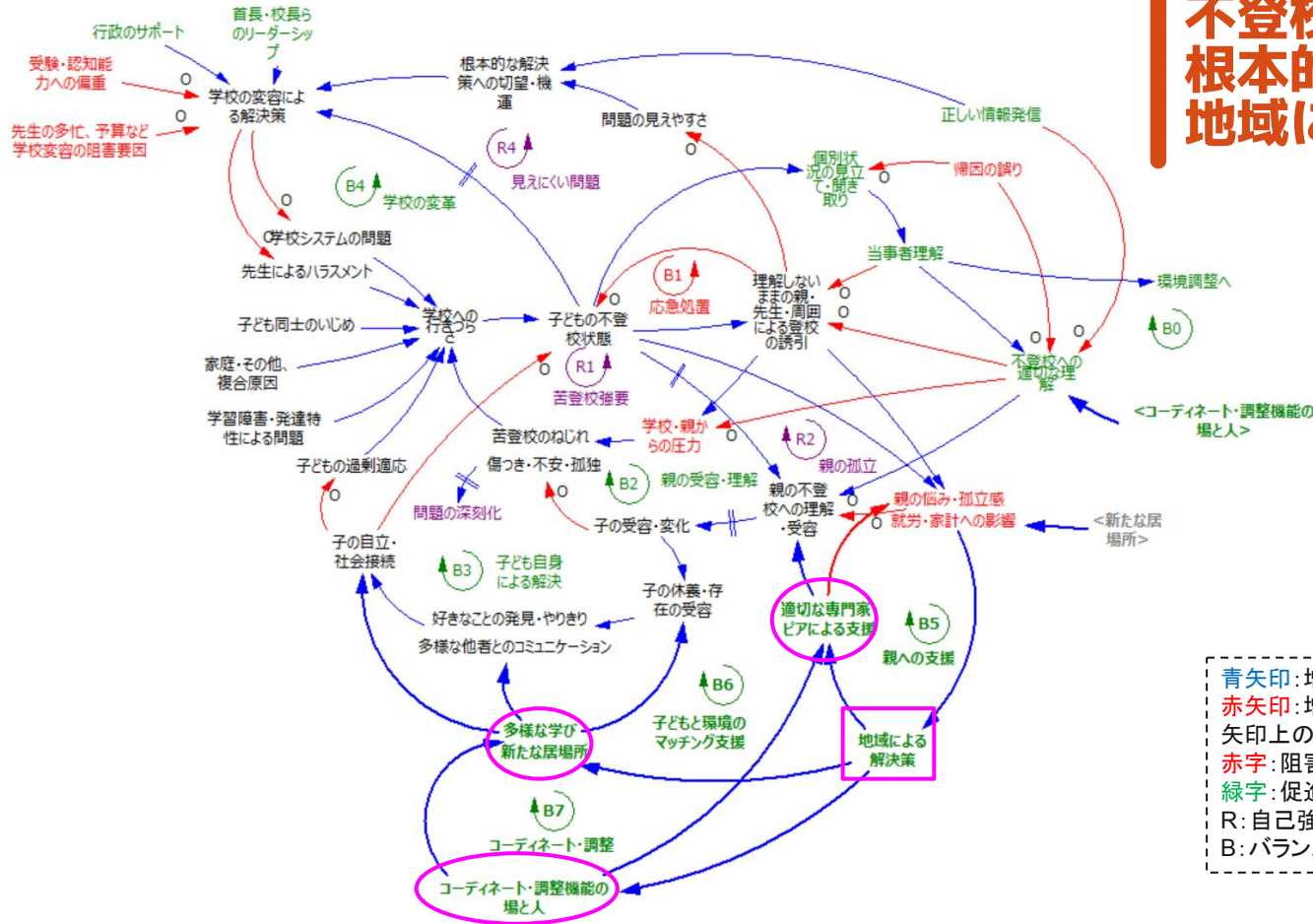
不登校システム図： 根本的な解決策（2） 親の受容・子供の変化



親が孤立し、悩むことで苦登校のねじれに入ることも多い (R2)
親の不登校への理解・受容 (B2)が子ども自身による自立・解決を促す (B3)

青矢印: 増減が同じ向きの因果関係
赤矢印: 増減が逆向き(O)の因果関係
矢印上の二重線: 遅れのある因果関係
赤字: 阻害要因、副作用の強い解決策
緑字: 促進要因、より望ましい解決策
R: 自己強化型ループ(好循環、悪循環など)
B: バランス型ループ(応急処置、根治策など)

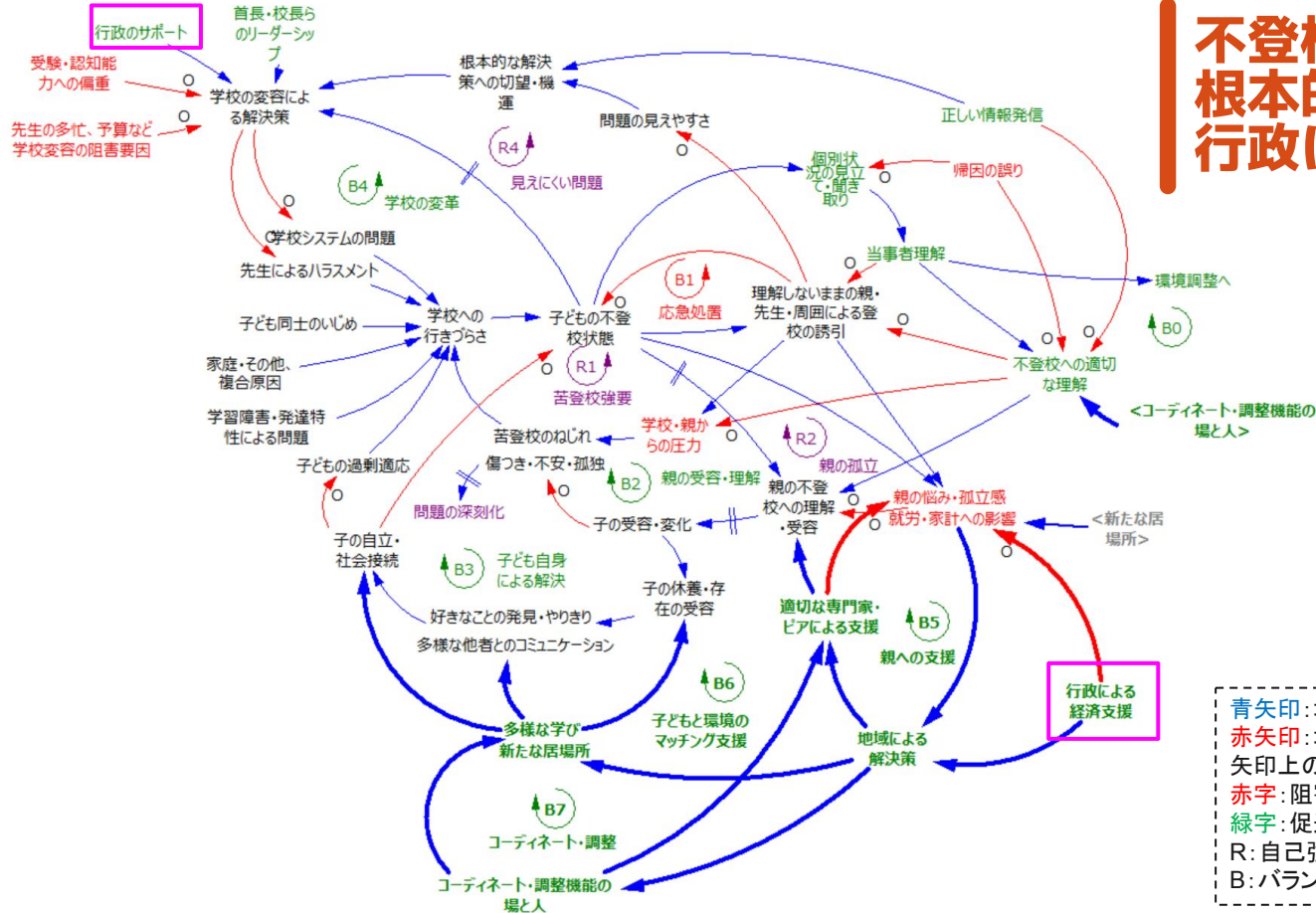
不登校システム図： 根本的な解決策（4） 地域による支援



地域支援を通じて、不登校の子どもを親を孤立させないための支援（B5）、子どもに多様な学びや新たな居場所を提供する支援（B6）が不可欠

- 青矢印: 増減が同じ向きの因果関係
- 赤矢印: 増減が逆向き(O)の因果関係
- 矢印上の二重線: 遅れのある因果関係
- 赤字: 阻害要因、副作用の強い解決策
- 緑字: 促進要因、より望ましい解決策
- R: 自己強化型ループ(好循環、悪循環など)
- B: バランス型ループ(応急処置、根治策など)

不登校システム図： 根本的な解決策（5） 行政による支援

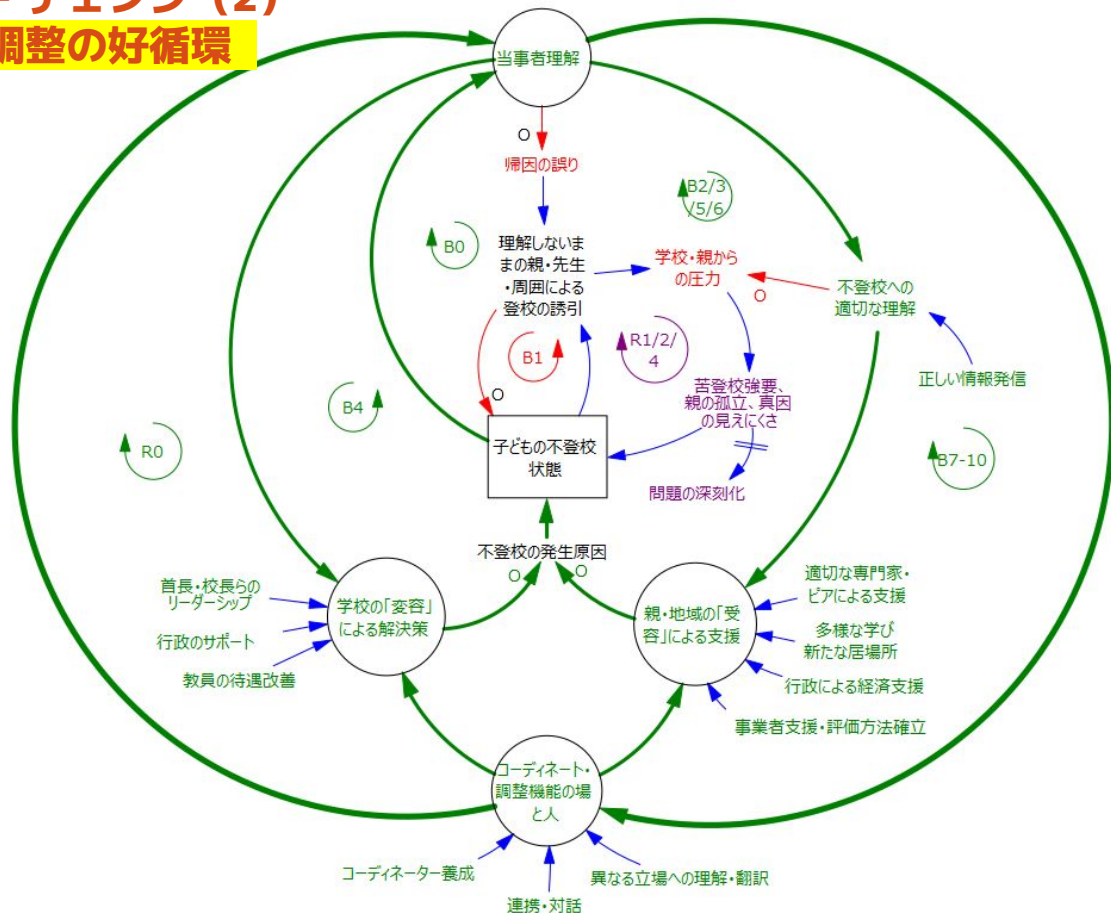


学校の改革（B4）、地域による解決策（B5,B6,B7）、ともに行政による支援が重要。

- 青矢印: 増減が同じ向きの因果関係
- 赤矢印: 増減が逆向き(O)の因果関係
- 矢印上の二重線: 遅れのある因果関係
- 赤字: 阻害要因、副作用の強い解決策
- 緑字: 促進要因、より望ましい解決策
- R: 自己強化型ループ(好循環、悪循環など)
- B: バランス型ループ(応急処置、根治策など)

不登校問題へのセオリー・オブ・チェンジ (2)

当事者理解とコーディネート・調整の好循環



青矢印: 増減が同じ向きの因果関係
赤矢印: 増減が逆向き (O) の因果関係
 矢印上の二重線: 遅れのある因果関係
赤字: 阻害要因、副作用の強い解決策
緑字: 促進要因、より望ましい解決策
R: 自己強化型ループ (好循環、悪循環など)
B: バランス型ループ (応急処置、根治策など)



最後のまとめ



3つの調査と1つの構造化WSから共通して導き出されたものは何か

形だけの再登校支援ではなく、**休養と自己回復**、**当事者理解**に基づいた、一人一人に寄り添った支援が必要なのではないでしょうか。

「学校（公教育）の変革」は根本的な解決策です。
また、子ども・保護者を支える、**「地域での解決」**も根本的解決策の一つです。

どちらも下支えする**行政からの経済支援**と、**不登校への適切な共通理解**がカギであり、当事者を入れた**対話の場**や**調整者の存在**が有効です。

主催： 特定非営利活動法人多様な学びプロジェクト

調査協力者：(敬称略)

◎全国調査定量データ二次分析・定性データ分析

朝倉景樹、長畑洋、原健人、内木場悠 (TDU・雫穿大学)

野田恵 (フリーランス)

大浦絢子 ((一社)学術・教育総合支援機構／国立教育政策研究所)

喜多下 悠貴・鈴庄 美苗 (三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング株式会社)

◎全国調査プレワークショップ・不登校経験者の声の分析

森下文

◎居場所の価値見える化調査

吉村春美 (東京大学 大学院教育学研究科 教育学研究員)

◎官民連携ベストプラクティスヒアリング調査

竹之下倫志 ((一社) いじめ構造変革プラットフォーム (PIT))

◎不登校前後の課題の構造化

小田理一郎 ((有) チェンジ・エージェント)

協力学識経験者：(敬称略)

朝倉景樹 (TDU・雫穿大学)

伊藤美奈子 (国立大学奈良女子大学)

加瀬進 (国立大学法人東京学芸大学)

助成： 令和6年度 独立行政法人福祉医療機構 社会福祉振興助成事業 (WAM 助成)